



TITLE:

宋人の見た柳宗元

AUTHOR(S):

副島, 一郎

CITATION:

副島, 一郎. 宋人の見た柳宗元. 中國文學報 1993, 47: 103-145

ISSUE DATE:

1993-10

URL:

<https://doi.org/10.14989/177548>

RIGHT:

宋人の見た柳宗元

第一章 柳文の風格に對する評價と影響

副島 一郎

京都大學

前言

唐と宋の所謂古文運動の關係を論じる際、從來は往々韓愈とのつながりに重點が置かれてきたようである。その態度は道統と文統の正統的繼承者が韓愈である以上、正しいのであるが、では唐代古文のもう一方の雄、柳宗元についてはどうなのだろうか？これまでの研究では宋初は韓愈ばかりを尊重し、柳宗元に冷淡で、崇韓抑柳の既定觀念が南宋の文壇を覆ったというものもある⁽¹⁾。しかし實際のところ、それほど單純なものではないようだ。拙稿では柳宗元がどのようにに受容され、宋代古文に如何なる影響をもたらしたのかを考えてみたい。

宋人の見た柳宗元（副島）

1 宋初 柳宗元に對する一般的評價

宋代古文の大きな特徴の一つは唐代古文に祖型を求めることである⁽²⁾にもかかわらず、唐と宋では文風の異なることについては、はやく南宋の羅大經が「韓柳は猶お奇字重字を用うるも、歐（陽修）蘇（軾）は唯だ平常輕虛の字を用うるのみにて、妙麗古雅なり、自ずから及ぶべからず。」（『鶴林玉露』卷五「韓柳歐蘇」）とその違いを指摘している。また王水照氏は、文學運動そのものとしては宋代古文運動は文風の改革であり、韓愈の文章の通達流暢な風格を選択的に繼承したものであることを述べておられる⁽³⁾。ならば、韓愈とは別に柳文は宋代古文にどんな影響を與えたのだろうか？そもそもどの程度學ばれたものなのだろうか？

宋初、古文の唱導者達の言説の中に柳文に關する具體的な評論は見られないが、皆高い評價を與えている。「少くして韓愈、柳宗元を慕いて文を爲り、因りて肩愈を名とし

紹先を字「『宋史』柳開傳」とした柳開（九四七—一〇〇〇）はその理由を「其の肩と謂うは斯れ古道を樂しむなり。其の紹と謂うはこれ祖徳を尙ぶなり。退之は子厚よりも大なり、故に以て名とす。子厚は之に次ぐ、故に以て字とす。」（『東郊野夫傳』）と説明している。それでも柳宗元にも韓愈と同様に尊敬を表わしていることに違いはない。ただ「或る人退之子厚の優劣を問う。野夫曰く、文は近けれども道同じからず、と。或る人諭らず。野夫曰く、吾が祖は釋氏を多とす、于いて以て韓に迫ばざるなり、と。」（同上）というように道統的觀念から柳宗元を韓愈に次ぐとしているが、これは逆に言えば、道は同じからざるも文は近し、なのであって、文章そのものについて言えば、韓柳を差別していないのである。例えば「其の文の最たるを言う者は、元韓柳陸を曰うなり。」（『梁拾遺に答えて名を改むる書』）とも言っている。

もう一人の唱導者王禹偁（九五四—一〇〇一）は「近世古文の主たるは、韓吏部のみ。」（『張扶に答うる書』）と言い、韓文の通達流暢を繼承することを主張するが、同時に又、

「今、文を携えて來る者、吾は悉く曰う、韓柳なりと。」

（『鄭襲に答うる書』）、（『孫何の集』）凡そ數十編、皆六經を師戴し、百氏を排斥し、落然と眞に韓柳の徒なり。」（『孫何を送る序』）又「進士丁謂なる者あり。……其の文は韓柳に類す。」（『丁謂を薦め薛太保に與うる書』）等と常に韓柳を併稱しているのである。「張扶に答うる書」は特に韓愈、揚雄の怪僻に學ぶ張扶にあてて、韓文の通達な面を學ぶべきことを教えたものであることを考えれば、王禹偁はただ韓文のみ推重したのではなく、韓柳の文を共に模範としたと考えてよいだろう。

彼らの高い評價は當然唐代に於ける柳宗元の名文家としての評價を受け繼いだものでもあろうが、直接には、我々はこの五代に於ける評價にも注意しておく必要がある。羅根澤氏の指摘によれば『舊唐書』の柳宗元に對する評價は相當高く、韓愈に對する評價はかえってさして高くないのである。⁽⁴⁾ 晩唐から宋初にかけて柳宗元に關する資料は少なく、評價の變遷を追うことはできないのだが、『舊唐書』の評價は我々が宋初の柳宗元の評價を理解するのに助けとなるものだ。つまり、宋初においては、古文の唱導者から

ばかりではなく、一般に比較的高い評價を與えられていたと考えられるのである。(柳文が五代の間によく讀まれていたかどうかは別の問題であるが。)例えば田錫(九四〇—一〇〇三)は「羅池廟碑陰の文に題す」⁽⁵⁾を作って「惟れ公の文は地を緯とし天を經とす。惟れ公の行いは聖を希い賢に齊し。彬彬然と黼黻の袞を華るが若く、鏘鏘然と咸韶の懸に在るが若し。」と柳宗元を稱揚しているが、田錫は「當時其の言を重んず」(『四庫提要』咸平集提要)とされた政治家で、「詩文は乃ち其餘事」(同)であり、古文の唱導者というわけではない。そして彼のこのような見方は、恐らくは特異なものではない。なぜなら田錫の存在は「其の没するや、范仲淹は墓誌を作り、司馬光は神道碑を作り、而して蘇軾は其の奏議に序し、亦之を賣誼に比す。之が爲に筆を操する者、皆天下の偉人なれば、則ち錫の生平知るべきなり。」(同)というものであり、彼の思想は同時代と後世に影響もしくは大きな共感を引き起こしているからである。我々はこの時期の人々は韓愈に注目するばかりでなく、同時に柳宗元をも高く評價していたと考えてよさそうである。

宋人の見た柳宗元(副島)

2 柳文の保存狀況と評價

しかし、五代の戦亂や、時代の文學好尚の影響を受けて韓愈、柳宗元ともにその文集の殘缺は甚だしかった。韓愈の文集でさえ、歐陽修によれば「予、兒童爲りし時、多く其(李彥輔)の家に遊び、弊筐の故書を貯え壁間に在るを見る。發して之を視、唐昌黎先生文集六卷を得たるも、脱落顛倒し、次序無し。」(『舊本韓文の後に記す』)という状態であった。柳宗元の文集となれば、宋代に初めて柳文を校訂出版した穆修によれば彼の當時でも「百餘篇」⁽⁶⁾しかなかったという。このため宋初古文家の第一の任務は散逸した韓愈と柳宗元の文章を搜集し、校訂出版することであった。ところで古文家たちの努力以前に北宋朝は太平興國年間に『文苑英華』を纂修している。南宋・周必大の「文苑英華序」によれば、「この時、印本は絶少、韓柳元白の文と雖も尙お未だ甚だしくは傳わらず。修書官は宗元、居易、權德輿、李商隱、顧雲、羅隱の輩に於いては或いは全卷收入」しているから、我々は『文苑英華』から北宋初の柳文の保

存状況を知ることができるはずだ。『文苑英華』に収める柳文は、一九七篇であり、その他に賦三篇、詩は一首収めるのみである。散文について言えば現存の約半数であり、これがたぶん當時集め得る限りの全ての柳文であつたと思われる。この數字は穆修の言う所よりも多いが、『文苑英華』は「校訂の終わった後、刊刻されたかどうかは史料の記載が曖昧なため、既に斷定し難い。」⁽⁷⁾のであつて、穆修は恐らく『文苑英華』を見ていなかったのだろう。しかしどのようなであれ、柳文の殘闕のひどかつたことと極めて手にいれにくかつたことがわかるが、さらに重要なことは『文苑英華』所收の柳文は一つの傾向をもつのである。それは即ち佛教に關する文章が甚だ少なく、僅かに五篇のみであり、また『非國語』も入っていないことである。

また『文苑英華』纂修後、眞宗朝に當たり、姚鉉は『文苑英華』の十に一を鈐擇し、『唐文粹』と號す。「文苑英華序」の選集を編んだ。しかし實際の收錄状況を調べてみれば『唐文粹』は時に『文苑英華』未收の作品をおさめており、姚鉉が獨自にそれまで知られていなかった柳文を搜し

出したことがわかるが、それでも『唐文粹』所收の柳文中、佛教に關係した文章はやはり一篇しかない。⁽⁸⁾むしろ『非國語』も未收である。この書は序に「止だ古雅を以て命と爲し、彫篆を以て工と爲さず。」と云うように、明確な基準を以て作品を取っているのだが、佛教に關係した文が少ないのは恐らくその基準のためではなく、宋初、穆修の柳宗元集出版以前には、柳宗元の多くの和尚碑や序、『非國語』等の後に問題となる作品はほとんど知られていなかったためだと思われる。そうだとすれば、この様な状況と當時の柳宗元評價は、密接な關係があつたことは容易に想像できる。『韓柳』文は近けれども道は同じからず。或る人諱らず。「ということがあつたが、なぜ諱らなかつたのだろうか？これはつまり柳宗元の佛教關係の文章が、一般にはほとんど知られていなかったことを表していないだろうか？このため、限られた柳宗元の作品しか眼にすることのできなかつた當時にあっては少なからぬ人が韓愈と柳宗元とは道も志もおなじくすると考え、柳開はそれに對し特にこの様に書いたのではなかつたのだろうか？そして柳宗

元の全體像は、穆修の校訂出版以後ようやく知られるようになったのである。

『唐文粹』は「今、世の唐代の類集を傳うる者：率ね聲律多く、古道に及ぶは鮮し。蓋し新進後生の名を干め試を求むる者の急用に資するのみ。豈に唐賢の文は兩漢に跡し、三代に肩するに、反って類次無く、以て『文選』を嗣がんや？」（序）と唐代の古文を繼承するための自覺的な選集たることを表明し、また「盛行」したといわれる（『文苑英華序』）。従ってその唐代古文家に對する認識も當時の古文家に共通し、或いは影響を与えたと思われる。「韓吏部は群流に超卓し、獨り遂古に高し。二帝三王を以て根本と爲し、六經四教を以て宗師と爲し、憑陵轡轡、古文を首唱す。ここに於て柳子厚、李元賓、李翱、皇甫湜、又從いて之に和す。」（『唐文粹序』）と言うのであるが、少し後の宋祁の『新唐書』文藝傳序はまさにこの見方を踏襲したものだ。この他、宋初では少なからぬ人が韓愈が首唱し、柳宗元が從つてこれに和した、と考へており、例えば王禹偁、陳彭年、石介、等皆そうである。⁽⁹⁾ところが歐陽修になると柳宗

元を「韓門の罪人」とみなしており、この見方は第二章で述べるように紛れもなく道學的主張から出たものである。歐陽修が柳宗元をこのように斷罪したために、また宋代古文における道統觀念の強さもあつてか、後世には、宋初から宋人は韓愈だけを尊重し、柳宗元には批判的であつたというような錯覺が生まれたようである。例えば羅根澤氏は「彼ら（宋祁、歐陽修）が二人の關係を混同したのは崇韓抑柳の既定觀念からでている。」⁽¹⁰⁾と述べておられる。歐陽修は確かに崇韓抑柳の觀念をもっているのだが、しかしその他の人の言説は必ずしもそうではないと思われる。『唐文粹』が柳宗元を韓愈の弟子達の中に置いたのは「既定觀念」からする事なのだろうか？これはそうではあるまい。なぜなら宋初以來、柳宗元に對する評價は高く、柳文の保存狀況からみて、穆修以前は人々は韓柳を基本的に道を同じくする者と考へ、ことさらな「既定觀念」はべつになかつたと思われるからである。これはつまり順序の問題なのである。清の王士禎が「韓吏部の文章は宋に至つて始めて大いに顯る。」⁽¹¹⁾と指摘するように、宋人の韓愈の古文に對

する評價と文學史上における認識は唐代をそのまま引き繼いだのではなく、むしろ宋人が韓愈を發見し、一躍尊崇の對象として評價したのである。そこで勢い、宋人は古文を首唱したのは韓愈であると考え、しかもこの意識が非常に強いために柳宗元は「従いて之に和」したと考えられたのであろう。だから所謂道統の主張から佛教を容認する柳宗元を批判して、韓愈の下に置いてゐるわけではないのである。そもそも宋初にはそのような道學思想は成熟してゐなかったのだから。それに「従いて之に和」とは道を同じくすることを意味し、道學思想から柳宗元を批判的に見てゐるわけではないのである。また、『唐文粹』所收の韓文は五七篇、詩賦八篇、それに對し柳文は六〇篇で、詩賦は收めない。これから見ても崇韓抑柳とはいえず、『唐文粹』も古道を擔うものとして柳宗元を高く評價していると言つてよい。詩賦を收めないのは恐らく當時傳つてゐた作品が極めて少なかったためであらう。『文苑英華』でさえも一首しか收めてゐないのである。

さて次に總集や選集の編纂の行われた後、更に重要な事

として別集の復元がなされねばならなかった。そこで、穆修（九七九—一〇三二）は韓愈と柳宗元の文を集めて別集を校訂出版し、宋代古文運動に一つの大きな礎石を据え、¹²「韓柳の文、（穆）伯長に因りて後行わ¹²れたのである。しかしその時、一般士人の柳文に對する態度はまだ次のようなものであった。

「（穆修）晩年柳宗元集を得、工を募り版を鏤る。印數百帙、携えて京の相國寺に入り、肆を設け之を鬻る。儒生數輩其の肆に至る有り、未だ價值を評さざるに、先に展掲披閱す。修就ち手をもて奪い取り、瞑目して謂いて曰く、汝ら一篇を讀み、句讀を失わざること能はば、吾は當に一部を以て汝に贈らん、と。其の物に忤ること此の如し。是より經年一部も售れず。¹³」

穆修の態度の問題を差し引いても、一部も賣れなかったのは、やはり西崑體盛行の當時、一般士人は柳文にさして興味をもつてゐなかつたことを示してゐよう。この様な時期に柳文を出版した穆修の先驅者的役割が大きなものであるのは間違いない。では彼自身の柳宗元評價はどうか？彼

は柳宗元集に後序を附して次のように述べている。

「韓柳氏起つに至りて、然る後能く大いに古人の文を吐き、其の言は仁義と相華實して雜ならず。韓の『元和聖德』

「平淮西」、柳の雅章の類の如き、皆辭は嚴、義は密にしで、製述は經の如し。能く崑然と唐德を盛漢の表に聳やか

し愧讓なき者は、二先生の文に非ざれば則ち誰ならんや。

…(柳宗元の文は)眞に韓の鉅文に配するか。…世の學者、如し古に志ざざれば則ち已む。苟も古に志し、立言の域を踐むを求むるに、二先生を舍てて由らざれば、之を能くすと曰うと雖も、余の敢えて知る所に非ざるなり。」(「唐柳先生集後序」)

當然のことながら、穆修の評價は一般士人とは極めて對稱的である。この序文は彼等に對する出版廣告としての側面もあろうが、この時、柳宗元の全體像が明らかに becoming しているにもかかわらず、穆修が柳宗元を韓愈と同等の地位に置いていることは注目に値する。これはやはり、それまでの見方が柳宗元を韓愈と道を同じくする者としていたために、穆修もそれを引き繼ぎ發展させたものだろう。そして

宋人の見た柳宗元(副島)

穆修の韓愈と柳宗元の二人をとともに模範とすべきだという思想と活動は弟子の尹洙や蘇舜欽らを通じて次世代に大きな影響をもたらしたのである。

ここまで柳文の保存狀況と評價の問題を扱ってきたが、では穆修までの宋初古文と柳宗元の古文とはどんな關係にあったのだろうか？宋初古文は一般に晦澁なものが多いのだが、それは一つには王運熙氏の言われるように、當時、古文に對して晦澁であつてこそ古雅であるという誤解があつたためである。⁰⁴そして柳文は韓文と同じように、或いは更に積極的にこの誤解をつくつたようだ。なぜなら、柳文は韓文同様高く評價されているうえに、宋人はしばしば柳文の韓文よりも難讀であることを訴えているからである。⁰⁵このため宋初古文は實作としては見るべき成果がなく、後人の批判的となつてゐる。例えば王士禎は「予、(柳)開『河東集』を讀むに、但だ苦澁を覺ゆるのみにて、初めより好處なし、豈能く之を言うも行ふ能わざるや。」⁰⁶と言ひ、『四庫提要』も王士禎の説を「過論に非ざる也。」と支持している。⁰⁷穆修の文章も當時にあつては名聲があつたが、

後世の評價はやはり高くない。王士禎は「文は拗拙、亦（柳）開の類にして、詩尤も工ならず。唐末宋初の風氣此の如し。」と批評している。¹⁸⁾つまりこの時期は準備段階でもあり、實作は柳文の怪僻な面の影響を多分に受けているのである。

3 宋代文風の自覺 尹洙と宋祁

穆修の門下からは尹洙兄弟、蘇舜欽兄弟等が出ており、彼らも當然その師から柳宗元をも學んだと考えられる。そのうち最も重要なのは尹洙（一〇〇一—一〇四七）、字は師魯である。なぜなら宋代の簡古な文風は尹洙から始まるからである。その尹洙がどのように柳宗元を見、また學んだかはよくわからないのだが、主には韓文を學んだと思われる。穆修が柳宗元集を出版したのは晩年のことでもあり、それまで、當時の古文家は一般には韓愈が主、柳宗元は從と考えていたからである。また師の穆修は排佛思想の持ち主で、母親の葬禮に當たっても「日び『孝經』喪記を誦し、未だ嘗て佛書を觀、浮圖氏に飯せざるなり。」（蘇舜欽「哀穆先生

文」という人物であつたから、尹洙にも強い排佛の主張があるのも自然な事である。¹⁹⁾この點からも、彼は韓愈を尊崇しているが、だからと言って柳宗元を非難することもなかったし、また批判的であつたわけでもないと思われるのだ。なぜなら、當時においては、柳宗元は一般に、從いて韓愈に和す者、と理解されており、しかも師の穆修はそれ以上に柳宗元を推重していたからである。實際、范仲淹によれば「天師魯を生み、當世に益あり。學を爲すの初め、時文は方に麗なるに、子は何人を師とせしや？獨だ古意、韓柳の宗經と、班（固）（司）馬（遷）の序事と有るのみ。」（「尹師魯舍人を祭る文」）なのである。故に我々は尹洙も柳文を學んだと考えて間違ひはないだろう。同門の蘇舜欽となればはつきりと柳宗元の影響をうけている。例えば彼の「滄浪亭記」一篇は明らかに柳宗元の「鈞鉞潭西小丘記」に學んだ作品である。

そして尹洙の簡古な古文と柳宗元には實は隱微な關係がありそうなのである。しかし、それについてはまず、尹洙から簡古な文風がうちたてられる事について話を始めよう。

〃（錢文僖公は）（歐陽）永叔、（尹）師魯に命じて記を作らしむ。永叔の文、先に成る、凡そ千餘言なり。師魯曰く、某は止だ五百字を用いて記すべけん、と。成るに及びては、永叔其の簡古に服し、永叔此れより始めて古文をつくる。〃
（『河南邵氏聞見前録』卷八）

この逸話は歐陽修が尹洙の啓發を受けて古文を作るようになったというだけでなく、その文風についても啓發されたという點で極めて重要である。そして尹洙が初めて意識的に簡古な風格を追求し、それが宋代古文の基本路線となつたのは間違いない。なぜなら宋初の王禹偁は古文は通達であるべきことを主張したが、簡潔たれという主張はなく、そして穆修にもまだこういう考えはない。さらに『朱子語類』卷一三九論文上に「最近ある人が（歐陽修の）『醉翁亭記』の草稿を買い得たところ、初めは「滁州は四面山あり。」と凡そ數十字も述べてあるのに、後には改定して「環滁皆山也」の五字だけであつた。」という話を記録しており、歐陽修も實際に簡潔を旨としたことがわかるのだが、これは尹洙に啓發された結果だろう。では尹洙は何故に簡古を旨

宋人の見た柳宗元（副島）

とするようになったのか？それは主には『春秋』に學んだ結果である。〃師魯は『春秋』に深く、故に其の文は謹嚴、辭は約にして理精し。〃（范仲淹「尹師魯河南集序」）という評はそのことを指摘し、歐陽修も〃師魯、文章を爲りては、簡にして法あり。〃（『尹師魯墓誌銘』）〃其の文を述べては則ち簡にして法ありと曰う。此の一句、孔子の六經に在りては惟だ『春秋』のみ之に當つべし。其の他の經は孔子の自ら作りたる文章には非ず、故に法有りと雖も簡ならざるなり。〃（『尹師魯墓誌を論ず』）と述べていることから明かである。尹洙には『五代春秋』二卷の著があり、『四庫提要』によれば〃穆修、春秋の學は之を（尹）洙に受くと稱す。然れども洙には『春秋』を説くの書無く、惟だ此の一編のみ。筆削頗る不苟爲りて、多く謹嚴の遺意を得。其の『春秋』の學の深きを知らん矣。〃といい、穆修、尹洙と春秋學との關係を示唆している。春秋學は宋人の思想中に極めて大きな位置を占めていることから考えると、一人尹洙のみならず、宋代古文の簡古な文風は『春秋』と密接な關係をもつであろうが、また柳宗元の春秋學は宋代春秋學の源流に立

ち、大きな影響を与えたものであるから、この点においても或いは穆修、尹洙に影響を与えたと考えられるのである。

天聖二年（一〇二四）、尹洙と同時に進士に登第した人たちの中に宋祁（九八八—一〇六六）がいる。兄 宋庠とともに「文學を以て名を天下に擅に」した『宋史』宋庠傳「文壇の雄である。彼の『新唐書』柳宗元傳は柳宗元評價の變遷を考える際、非常に重要な文章であり、柳文に對する評價についてだけ言っても、『舊唐書』とは明白な違いがある。

『舊唐書』の柳文に對する評價は「尤も西漢詩騷に精し。」であるが、これに對し『新唐書』は「文章を爲りては卓偉精緻」といい、評價對象が西漢の詩騷に限られず、柳文の全體に廣げられている。又、彼は『新唐書』を撰するに當たつて多くの韓柳文を採用したが、このことから宋祁が柳文を重視したことが窺える。また正史である以上、當時の士人たちの柳文に對する見方も反映されているはずである。では宋祁はどのように柳宗元の文章を見ていたのだろうか？「柳州、文を爲りては或いは前人の陳語を取りて之を用う。韓吏部の卓然として不朽、古に巧めず、而して語は一

にこれを己より出だすには及ばず。」（『筆記』卷上）と柳文を韓文に如かずとする。そして宋祁が文章制作にあたって韓愈の「惟だ陳言を之れ努めて去る」の精神を採用したことは注意されなければならない。彼は「韓愈曰く、惟だ陳言を之れ努めて去ると。此れ乃ち文を爲るの要なり。」（『筆記』卷上）ときっぱりと宣言もしているのだ。彼は韓文を第一に推したのだが、それは意識的に韓愈の古文制作の方法を選択する事と結びついており、これから柳文を韓文に如かずと考えたのである。宋祁は先行の柳開、王禹偁、穆修らがただ單に韓愈に學べと言ふのとは異なり、尹洙同様、古文を作る具體的な方法を模索し始めていることに注意したい。又これは彼が主には韓愈の文風の晦澁な面を選択したことを表してもいる。だから彼は好んで晦澁な文章を作り、そのため歐陽修にからかわれてもいるのである。宋祁の主張は後繼者をもたなかったけれども、このことから當時、宋の士大夫は自らの新しい文風を追求し始めていたことがわかるであろう。一つは尹洙の簡古であり、一つは宋祁の晦澁な文風であつた。

4 文學好尚の變化

彼らが新しい文風を模索し始めた背景には一つの重要な現象がある。それは當時の讀書内容及び文學好尚の變化である。ではこの現象はなぜ起こり、その中で柳文はどんな關わりをもつたのだろうか？南宋・陸游の『老學庵筆記』卷八に、

「國初、『文選』を尙び、當時の文人、此の書に意を専らにす。故に草は必ず王孫と稱し、梅は必ず驛使と稱し、月は必ず望舒と稱し、山水は必ず清暉と稱す。慶曆に至りて後、其の陳腐を惡み、諸作者始めて之を一洗す。其の盛んなる時に方りては、士子之が爲に語つて、『文選』爛るれば、秀才半ばたり、と曰うに至れり。」

とこの變化を指摘している。又、清の閻若璩が『困學紀聞』卷一七「李善『文選』に精し」の條に付した按語には次のように言う。

「『新唐書』蕭至忠傳（蕭）嘗て太平公主の第を出で、宋璟に遇う。璟戲れて曰く「蕭傳に望む所に非ず」と。此

れ潘安仁の「西征賦」の語を用う。司馬公『通鑑』を作り改めて「蕭君に望む所に非ず」と曰うは、便ち是れ『文選』に出づるを知らざればなり。宋景文となれば則ち自ら手づから『文選』を抄すること三過すと言う。」

ここから我々は、慶曆前後に教養の内容に變化の生じ始めていたことが窺えよう。ただ清の顧炎武『日知錄』卷二六「新唐書」の條に、「昔人宋子京は對偶の文を喜ばずと謂う。其の史を作りては有唐一代遂に一篇の詔令も無し。」と言うのをみれば「手づから『文選』を抄すること三過す」とは矛盾するようであるが、大雜把にいつて慶曆以前は普通『文選』が主要な文學課本であつて、科擧もまた詩賦を主としていたのであつた。年下の歐陽修（一〇〇七—一〇七二）もまだこのようであつて、「況や今の世人の所謂四六なる者は、修の好む所に非ず。少くして進士となりし時は、之を作るを免れず。及第してよりは遂に棄てて復た作らず。」（陝西安撫使范龍圖に答えて辟命を辭する書）と回顧しており、宋祁、歐陽修の世代は少青年時代には對偶の文を懸命に作らざるをえなかつたのである。司馬光は大中祥符三

年（二〇一九）の生まれ、宋祁よりも二一歳の年少であり、寶元元年（一〇三八）に進士に及第している。慶暦元年は一〇四一年であるから、司馬光の『文選』の教養が宋祁よりも劣るのは必ずしも科擧の爲とは言えないが、宋祁から司馬光に至る間に讀書内容及び文學好尚の變化が徐々に大きくなってきていたことは言えるだろう。なぜなら司馬光もまた四六の文を好まず、後、神宗に翰林學士に擢げられようとした時、²⁴「臣は四六を爲る能わず。」とまでいつて辭退しようとしているのだ。つまり、唐から宋初にかけて隆盛を極めた『文選』學は、慶暦の前後から衰微しはじめたのである。文學好尚の變化にはいろいろの原因があり、複雑であるが、陸游はなぜ慶暦というのだろうか？この變化を決定的にしたのは所謂「慶暦の新政」によるところが大きく、慶暦以後この變化が明確になったからだと思うれる。慶暦年間、范仲淹等は諸々の政治改革を行ったが、そのうちとりわけ重要なのは教育制度の改革である。張邦彥・朱瑞熙兩氏の論文「宋代國子學の太學への演變を論ず」によればそれは次のようなものであった。

「北宋の官立學校の國子學を除いて他校なき狀態は、慶暦三年に打ち破られた。この年、天章閣侍講史館檢討の王洙と國子監の建議をいれて四門學が成立したのである。一年後、太學は單獨で建校する。太學と四門學の教育對象は同じで、どちらも「八品以下より庶人の子孫に至るを以て學生を補充」（『續資治通鑑長編』卷一四八慶暦四年四月壬子條）した。このため、太學がひとたび設けられると四門學はすぐさま廢され、又國子學、太學の二學が並立する局面が出現したのであった。注意に値するのは、宋代太學は出現のそのときから其の性質は唐代太學と同じではなかったことだ。太學は唐代にあっては中級官僚子弟のための特殊學校であったというなら、宋代にあっては士庶の子弟をまじえた普通學校であった。²⁵」

兩氏は北宋初年から慶暦二年（一〇四二）の間を國子學から太學への演變の第一段階とし「其の基本特徴は國子學の學生募集範圍の擴大、境界線の縮小である。」といい、慶暦三年より熙寧四年（一〇七二）の間を第二段階とし「其の基本特徴は太學の獨立建校と次第に興隆していったことであ

る。(同上)と述べている。そうだとすれば、このような士人と庶民の接近合流はきつと文學好尚の變化をもたらし、慶曆以後特に大きくなったと考えられる。(我々はここで宋代における庶民文化の勃興を想起してもよい。)宋祁、歐陽修、司馬光等はみな四六文を作れなかったわけではなく、若い時分には相當『文選』を學んでもいたのであった。それにもかかわらず、基本的に西崑體の類や、『文選』のような浮華偶麗の文を排斥し、⁽⁸⁰⁾「空言を爲さずして有用に期す」ことを主張したのは、主にはその思想によるであろうが、しかし思想のせいばかりではなく、それと切り離せないことであるが、彼らの頃から文學好尚に變化が起こっていたと考えてよい。藝術の風格や好尚は思想からだけでは説明できないからである。そしてそれは既に司馬光において見出されるのである。

『文選』學の衰微はまた宋初以來の學問の趨勢と關係がある。宋初、儒學はどん底まで衰落していたが、次第に興隆し、仁宗の時に至っては⁽⁸¹⁾「士の儒術に服する者、數うるに勝う可からず。」という活況を呈し、特に慶曆以後につ

いては、このような學問趨勢が范仲淹の科擧の改革と直接關係のあることはいうまでもない。⁽⁸²⁾慶曆中、太學を興し、湖州に下りて其の法を取り、著して令と爲す。(胡)瑗既に學官と爲りては、其の徒益ます衆く、太學は容るる能わず、旁らの官舎を取りて之に處すに至れり。」というから、范仲淹の改革の効果の程が知れよう。このような文學好尚の變化及び儒學の復興にしたがって『文選』は次第に顧みられなくなり、それにかわって韓柳の古文が讀まれるようになっていったのは間違いないと思われる。

そして西崑體が廢れた後、嘉祐年間に至るまで流行していたのは、⁽⁸³⁾「太學體」と呼ばれる文體であつた。この文體は生澁怪僻であることを特徴とするのだが、この文風は疑いなく韓柳のある面の影響を受けたものである。例えば歐陽發の『歐陽修事迹』によれば、當時の科擧の答案中には、甚だしきは⁽⁸⁴⁾「僻澁なること狼子豹孫、翰林逐逐の如きの語」があつた。そして葛曉音氏の指摘によれば、この「翰林逐逐のようなのはすなわち柳宗元の「貞符」中の「翰林總總」の一語より出る」といふ。當時太學の「三先生」と呼ばれた

のは孫復、胡瑗、石介であつたから、太學生の文章規範は韓愈、柳宗元の文であつたろう。三先生の思想からみて、太學生は韓文を主としていたろうが、三先生も柳宗元を批判しておらず、かえつてやはり重きを置いている以上、柳文が當時の文風に與えた影響は小さくないはずである。嘉祐二年（一〇五七）、歐陽修が知貢舉となり文風の改革を強行し、宋代古文運動は完成期を迎えるが、穆修以後から歐陽修諸人に至るこの時期は、宋代古文の風格に對する自覺が芽生え、古文を作る具體的方法が模索されたのであつた。太學體もまたその試行錯誤の過程なのである。この間、韓愈が首唱者として主要な位置を占めていたではあるうが、柳宗元も無視などされておらず、簡古な文風にも晦澁な文風にも韓愈同様に影響を與えたと考えられる。

5 蘇軾と柳宗元

ところが歐陽修は柳宗元を嫌い、専ら韓愈を學んだのであつた。しかしそれは彼個人の柳宗元に對する見方であつて、彼の同時期及び以後の柳文と宋代古文との關係にはあ

まり影響がないようだ。そこで彼と柳宗元との關係については主に第二章で分析を加えることにしたい。重要なのは蘇軾と柳宗元の詩文との關係である。蘇軾は歐陽修が嘉祐二年に及第させた進士であり、後年文壇の領袖となり、その影響力は絶めて大であつた。そして彼は特に晩年柳宗元を愛讀し、多く柳宗元の詩文に學んでいるからである。

周知のように、蘇軾は海南島に謫居した際「惟だ陶淵明一集、柳子厚詩文數冊のみ、常に左右に置き、目して二友と爲」したのだつた。〔程全父推官に答うる書〕後、南宋の呂本中は「東坡晩年敘事の文字多く柳子厚を法とす。」「〔童蒙詩訓〕東坡之文」といい、羅大經もまた「歐陽修は韓愈に似、蘇軾は柳宗元に似る。」「〔鶴林玉露〕卷五」と評しており、蘇軾は陶淵明、柳宗元の文學の強い影響を受けたようだ。また逆に「陶淵明、柳子厚の詩、東坡を得て而る後發明さる。」「〔張戒〕歲寒堂詩話〔卷上〕」というように、二人は宋代において特にその價值が認められ愛好されたのであつた。

ところで陶淵明はともかく、柳宗元の詩について見れば

唐代では殆ど顧みられておらず、現在では我々は司空圖の評論「今華下に於いて方めて柳詩を得て、其の探搜の致を味わう、亦た深遠なり矣。」（『柳柳州集の後に題す』）を見ることができくらいなのだ。これは柳宗元の詩風が唐人の趣味にあわず、かえって宋人の尊重する詩風と相近いものがあるためのものである。ただ陶淵明について言えば、唐代、白居易に「效陶潛體詩十六首」があるように、すでに一部の先覺者によって評價され學ばれてもいたが、本格的な受容と評價はやはり宋代に始まるのである。しかし二人が宋代に「發明」されたのは宋の文學好尚にたまたま合致したためばかりではなく、宋人が積極的に陶柳的な風格を吸収しようとしたためでもある。陶淵明、柳宗元の詩は宋人の審美感、藝術觀の形成の上に大きな役割を果たしたと考えられるからだ。この陶柳の詩風について蘇軾の言うところを見てみよう。

「柳子厚の詩は陶淵明の下、韋蘇州の上に在り。（韓）退之豪放奇險となれば則ち之に過ぐるも、溫麗靖深は及ばざるなり。枯澹を貴ぶ所の者は、其の外は枯にして中は實、

澹に似て實は美なるを謂う、淵明、子厚の流は是れなり。」

（『東坡題跋』卷二「韓柳詩を許す」）

又「獨だ韋應物、柳宗元のみ纖體を簡古に發し、至味を澹泊に寄す、餘子の及ぶ所に非ざるなり。」（『黃子思詩集の後に書す』）

彼のこの評論は宋人の簡古澹泊を尊重する藝術觀を代表しているといつてよいだろう。蘇軾が柳宗元を學んだのは正にこの風格を尊重したためであり、また、他の宋人も柳宗元の風格を學んでいる。黃庭堅も「故に柳子厚詩數篇を手書して之を遺すは、子厚此くの如く陶淵明を學び、乃ち能く之に近づくを爲すを知らんと欲するのみ。」（『柳子厚詩に跋書す』）と熱心に陶柳を學び、「愚溪に遊ぶ」などの作品もある。その他、歐陽修も「我も亦子厚を奇とし、編を開けば毎に徘徊す。詩を作りて同好に示し、我が爲に山限に銘せ。」（『永州萬石亭』）といい、梅堯臣には「乞巧賦」（柳宗元「乞巧文」に學んだもの）があり、これらも柳宗元に學ぼうとする態度の現れである。また陶柳の詩を尊重して並稱する評論は宋代ではよく見られ、詩についていえば、「退之

の詩は子厚に如かず⁸⁴」とさえ考えているのである。

ところが、蘇軾は柳詩を賞賛するにもかかわらず、柳文の風格に言及することは少ない。ならば蘇軾は柳文はあまり評價していなかったのだろうか？しかし「作者文を爲り、詩を爲りては、格も亦見る可く、豈當に彼に善きに此に善からざるべけんや？」（司空圖「柳柳州集の後に題す」、つまり同じ作者の手に出る以上、その文學の風格や內的境界は相同じいか、近いものであるはずである。海南島にいる時、彼は柳詩を愛好するばかりでなく、彼自身が記すように柳文をも愛讀していたのである。それはきつと自己の困境が柳宗元と共通するためばかりではなく、やはり柳宗元の文章にもその詩と共通したものを認めていたからに違いない。そうならば、なぜ柳文を語ることが少ないのだろうか？おそらくは文章についていおうとすれば、往々その思想内容について語ることになってしまうからである。しかも蘇軾も當時の士大夫と同じように「文章は華采を以て末と爲し、而して體用を以て本と爲す。」（「喬舍人に答うる啓」）「濟世の用に意有りて、而して耳目の觀美に志さず。」（「虔

倅敵括奉議に答うる書」と考えており、このため柳文を語ろうとすれば、風格よりはその思想を問題にすることにならざるを得ないのである。また付帶的なことだが、宋代、多くの詩話が生まれたにもかかわらず、同じ性質をもつものとしては一つの文話もないことに、詩と文について評論の性質の違いが現れていよう。そして蘇軾の思想は必ずしも柳宗元を肯定できないからである。だから同意できさえすれば、柳文に賞賛を惜しむわけではないのだ。例えば「柳子厚南遷されて始めて佛法を究め、曹谿南嶽諸碑は古今に妙絶す……おもえらく、唐より今に至るまで祖師を頌述する者多し矣、未だ通亮簡正子厚の如き者有らず、と。蓋し其の言を推本するに孟軻氏と合す。其れ學ぶ者をして晝見せ夜之を誦せしめざるべけんや？」（「柳子厚大鑑禪師の碑の後に書す」という。そうであれば蘇軾は柳文についてはその通亮簡正な風を高く評價していたのであって、やはり柳詩評價と通じている所があると言えよう。

ここで、一度取り上げるに値するのは柳宗元の盟友劉禹錫の評論である。彼は柳文を評して次のように言う。

〃其の詞は甚だ約なれども味は淵然と以て長し。氣をもつて幹と爲し、文をもつて支と爲す。古今に跨躐し、鼓行乗空、附離以て鑿柄せず、咀嚼して文字有らず、端にして曼、苦にして腴、佶然として以て生じ、癯然として以て清し。〃〔柳子厚に答うる書〕

劉禹錫のこの評論は蘇軾の柳詩に對する評論と共通するなしい非常に近いものがある。もし、このようであればやはり詩ばかりではなく、柳文の風格も宋人の藝術觀と近いところがあり、宋代の藝術觀を形成する上でも比較的大きな影響をもたらしたのではないだろうか？

蘇軾の詩文は柳宗元に學んだところがあるにせよ、もちろん柳宗元は彼の詩文にとっての一資であり、蘇軾の風格のなかに混然一體ととけ込み昇華してしまっている。〃子厚の文、溫雅は班固に過ぐ。退之の文、雄健は司馬子長に過ぐ。歐陽公は退之の純粹を得て子厚の奇に乏し。東坡は馳騁して諸公に過ぎ、簡嚴及ばざるなり。〃（王十朋『梅溪先生文集』卷一九「雜說」）なのである。柳宗元と蘇軾の關係について考えるとき、最も重要なのは、蘇軾が積極的に柳宗

元を學び、宋人の耳目を柳宗元に開かしたことであろう。柳宗元に對する評價は蘇軾の出現を経て大いに高まるのである。北宋にあつても、曹輔（生卒年未詳、嘉祐八年進士乙科）は紹聖二年（一〇九五）「柳侯を祭る文」を作り、〃其の文や秋濤の雷風を鼓するに、洶湧澎湃として垠なきが若く、八駿の通衢を騁するに、王良の策を執りて造父の輪を挾むが若し。老韓（愈）も駭汗し以て手を縮め、（李）翱（皇甫）湜も喪氣して以て脣を噤めり。〃ともちあげている。この時、曹輔は廣西の提點刑獄であつたから、彼の話は割り引きして聞かねばならないが、しかし未曾有の評價である。蘇軾は惠州にいた時（紹聖元年—紹聖四年）しばしば彼と手紙のやりとりをしており、又、秦觀は彼のために「曹號州詩集の序」を書いており、彼と蘇軾とは比較的親密な關係にあつたと言つてよいだろう。「柳侯を祭る文」が蘇軾の影響を受けて書かれたものかどうかはわからないが、少なくとも蘇軾以後、韓主柳從の觀念に變化が生じたことは確かで、「柳侯を祭る文」もその現れと思われる。その明かな標識は崇寧三年（一一一四）に柳宗元を文惠公に封する勅が下されている

ことである。これは『斯(柳州)の民の欲に従う』³⁶⁾ものであるが、その背後にはやはり柳宗元に對する尊重があったはずである。

6 柳文の影響

北宋の末年から、韓柳歐蘇の詩文に關しての具體的な評論が現れ始め、南宋になればもう枚舉に暇がないほどである。また南宋では多くの宋代古文の選集が編まれたが、

『世の傳誦する所、惟だ呂祖謙『古文關鍵』、謝枋得『文章規範』、及び(樓)昉の此の書『崇古文訣』のみ。』(『四庫提要』)であった。『崇古文訣』について『四庫提要』は『此の書篇目較や備わり、繁簡 中を得、尤も學者に裨する有り。蓋し訪業を呂祖謙に受け、故に其の師説に因りて、闡を推し密を加うればなり。正に未だ文の皆習見なるを以て之を忽にす可からざるなり。』³⁷⁾といい、『直齋書錄解題』はこの書を『迂齋古文標注』として載せ、『大略 呂氏(古文)『關鍵』の如し。而して取る所は『史』(記)『漢』(書)より下は本朝に至る。篇目増多し、發明尤も精當、學者之を便と

す。』³⁸⁾という。

『古文關鍵』の卷首には總論があり、韓柳歐蘇それぞれの文の風格、及びどのように古文を學ぶかがまとめられているのだが、この意見は『崇古文訣』との關係からみて、當時において普遍かつ妥當なものと考えてよいだろう。又『四庫提要』はこの書について『實に文を論ずる爲に作る。講學には關せず。』(『直齋書錄解題』は『標抹注釋し、以て初學に教う。』³⁹⁾といっているから道學的な偏向もさしてないと思われる。『古文關鍵』總論に言うところを見れば、呂祖謙は蘇軾の文はやはり柳宗元の影響を比較的多く受けていると考えているようである。柳宗元の文は『關鍵』³⁸⁾なところがその風格の特徴であり、蘇軾の文も『亦た關鍵の法を得』とされているのである。とりわけ宋朝の南渡以後、宋人は柳文を重視するようになるのだが、このことは『建炎以來、蘇氏の文章を尙び、學者翕然と之に従い、而して蜀士尤も盛んなり。亦た語の曰う有り、蘇文熟すれば羊肉を吃し、蘇文生なれば菜羹を吃す、と。』(陸游『老學庵筆記』卷八)という状況の下で、蘇軾の文風の一つの重要な來源

が柳文であるという認識があったからであらう。

こうして宋代古文の典範としての、柳宗元の地位は確固不動のものとなっていく。その標識はまた紹興二八（一一五八）年に柳宗元を文惠昭靈侯に加封する勅が下されたことである。その告詞には「生きては道學を傳え、文章は百世の師たり。」とあり、北宋の崇寧三年（一一〇四）の勅に「文章は冊にあり、功德は民にあり。」としか言わないのは明かに違い、評價の高くなっていることがわかう。そして文章の典範としては、公然と柳文は韓愈と等しい地位を占めるようになる。例えば、王十朋（一一一二—一一七二）は政治家としての柳宗元には批判的であったが、彼の作った「策問」には「韓愈、柳宗元、俱に文を以て唐世に鳴り、目して韓柳と曰う。二人は更ごも相推遜し、議する者と雖も亦得て之を雌雄する莫し。…今二文、世に並び行われ、學者の取る所の法たり、眞に文章の宗匠なり。」と言うのである。策問である以上、彼の言うところは當時の一般状況を反映していると考えてよい。しかし、言うまでもないが道學の觀點から見た場合には政治家、思想家としての柳

宋人の見た柳宗元（副島）

宗元を批判する人々は相變わらずたくさん存在していたのである。そして文統、道統は韓愈にあったために全體的に言えば、韓愈が最も崇敬されていたが、柳宗元は既にもう「従いて之に和す」ものではなくなったのである。韓柳の併稱が普通の事になったのであり、そうならば柳文が宋代古文にもたらした影響は無視できないものであるはずだ。

では、柳文は具體的に宋代の文風にどのような影響を与えたのだろうか。このことは宋人が柳文の如何なる特徴に學ぼうとしたかに窺うことができるだろう。なぜなら、宋代の古文は韓愈、柳宗元のいずれに對してであれ、批判的に繼承しようとしたものだからである。そこで宋人が柳文に與えた評語について検討してみよう。柳文に對する見方はもちろん各人各様であるが、大雑把であれ共通點を見いだせないだろうか。ここに蘇軾以後から南宋末までの柳文に對する評語を集め、それらを意味の近いものと分類してみれば次のとおりである。⁴⁰ただし、互いに重複するものもある。

精類 精密、精緻、精理、精妙、精奇、精金、析理精博、

(事麁、論事較麁)

簡類 簡古、關鍵、緊嚴、局促、辭簡意多、句雖少極有反覆

深類 深宏、雅奧、雄深、宏闊、奧僻、意味悠長

古類 簡古、較古、高古、最古

高類 高古、高妙、卓偉、文高、(峻潔、清壯)

雅類 雅奧、溫雅、雅健、典雅

奇類 精奇、奇峭、好奇、傑異、務爲新奇、瓌奇絕特、立

新機杼、法奇於柳

(理類) 精理、達理、析理精博、義理明瑩、理長而味永、

理意多舛駁、理正而文工、分明見規模次第(これは純粹に柳文の風格とは言えぬかもしれないが、論理明晰なことも風格の形成に與かつては必ずだと考えられ、このことは柳文の非常に重要な特徴の一つである。)

これらの評語によって表された特徴は相互に密接に關係するものだ。例えば、精類、簡類、深類は一つの大きなグループとすることができ、古類、高類、雅類も一つのグループとすることができよう。又、精類と理類も深い關係

にある。そして全體的に見て、“精、簡、深”などが柳文の最も特徴的な風格であると意識されたのであり、宋人はこのような風格を學びとうとしたと言ってよさそうである。そしてこの評價はまた劉禹錫、蘇軾の柳宗元の詩文に對する評價とも期せずして一致していると言えるだろう。逆に言えば柳宗元の文學は宋代古文に“精、簡、深”等の風格をもたらしただけである。

第二章 政治家柳宗元と宋人

1 宋初政治家の自覺と柳宗元

柳宗元と宋代古文の關係が今まであまり注意されて來なかつた一つの理由は、やはりつい近年まで彼が歴史的に政治犯として見られてきたからだだろう。事實、宋人の言説の中に王叔文一黨としての柳宗元を批判するものは容易に見い出される。だが、文章の師としての柳宗元が、おそらく大方の預想を超えて宋人に受け入れられていたことが明らかである今、この點についても再検討する必要がある。言

うまでもなく、古典時代にあつては文學と政治は切り離せないものであり、柳文に對する評價も實は政治家柳宗元への評價と密接に關係するものだからである。

政治家柳宗元に對する批判の原點は他ならぬ韓愈である。

『順宗實錄』は言わずもがな、『新唐書』柳宗元傳での柳宗元批判も、わざわざ韓愈の文にある句を用いているくらいである。宋人は韓愈に影響されているようなのだが、前に少し觸れたように『舊唐書』は柳宗元に高い評價を與え、かえつて韓愈はいささか謗られているのだ。この逆轉現象はどうした事だろうか？ 韓吏部文章、宋に至つて始めて大いに顯る。//であつてみれば、柳宗元への批判は韓愈への尊崇、道學觀念の成熟にしたがつて強まったのであつて、我々は、宋初、政治家柳宗元に對する見方は宋祁の頃の評價とは異なつていたと想像してよいのではないか？

宋初、最も早い政治家柳宗元に關する言説はおそらく田錫の書いたものである。田錫(九四〇—一〇〇三)、字は表聖、太平興國三年(九七八)の進士である。第一章ですでに少し言及したが、彼は「羅池廟碑陰の文に題す」において滿腔

宋人の見た柳宗元(副島)

の尊敬を柳宗元に捧げている。貞元から元和にかけての柳宗元は「名を貞元の間策し、籍を元和の時に通じては、闊歩高視し、飛聲流輝あり、佐王の才は以て施さるを得んと謂い、當朝の大臣は我を遺れざらんと謂う」のであつたと田錫は言う。そして柳宗元の生涯については劉禹錫、韓愈、呂溫、皇甫湜などの知友がいたにもかかわらず、//而るに公、位は南宮外郎爲るに過ぎず、命は柳州の牧爲るに過ぎず、謫を以て出で、死に至るも服さず。明堂の材の谿谷に朽ちるが如く、千里の馬の輦轂に軛せらるるが如きは、時なるか？ 命なるか？ 是れを以て仁を爲す者未だ必ずしも祐を獲ず、徳を修むる者或いは多福を虧くを知る。//とその才能を發揮できなかったことを惜しんでいる。田錫のこの一文の柳宗元に對する賛辭は實は古文家としてではなく、政治家としての側面に重點が置かれているのである。しかも後世、柳宗元批判の焦點の一つは彼が所謂王叔文一黨に参加したことであるのを考えれば、田錫の柳宗元評價は注意に値するだろう。では、田錫のこのような評價は何に由來するのだろうか。その一つに彼の政治的自覺を擧げるこ

とが許されると思う。『宋史』田錫傳によれば彼の生平は次のようなものであった。

「表を遺して上に慈儉を以て位を守り、清淨を以て人を化し、安に居りて危を思い、治に在りて亂を思うことを勸む。上、之を覽て惻然、宰相李沆に謂いて曰く、田錫は直臣なり。朝廷少しく闕失ありて、方に思慮に在るとき、錫の章奏已に至れり矣。此の若き諫官、亦得べからず、と。

…錫、耿介にして合うこと寡く、未だ嘗て權貴の門に趨らず。…魏徵、李絳の人となり慕い、盡規獻替を以て己が任と爲す。嘗て曰く、吾れ朝に立ちて以來、章疏五十有二、皆諫臣任職の常言なり。苟も従わるるを獲れば幸いなり。豈に副を藏して後に示し、時を諉りて直を賣る可けんや？と。悉く命じて之を焚く。」

『四庫提要』も「詩文は乃ち其餘事」と言うように田錫は政治家としての強い自覺、有爲の精神を持った人物である。またこのような自覺を持った人物は田錫だけではない。宋初古文運動の領袖、王禹偁にもまた柳宗元を批判する言説はなく、逆に柳宗元の劉禹錫に對する義氣を稱揚し

ている。⁴¹そして彼は單に古文運動の領袖であつたばかりでなく、また宋初を代表する政治家でもあつた。彼は「事に遇いては敢えて言い、人物を臧否するを意^こみ、直躬行道を以て己が任と爲す。嘗て云く、吾若し元和の時に生まれなば、李絳、崔群の間に従事するも、斯れ媿無からん矣、と。其の文を爲り書を著すや、多く規諷に涉り、是を以て頗る流俗の容れざる所と爲り、故に屢しば擯斥せら」れたのである（『宋史』王禹偁傳）。この態度は田錫と相共通するものと認められよう。

王禹偁は政治家柳宗元については具體的な評論を残していないが、彼の「古の君子の學を爲すや、祿位に在らずして道義に在るのみ。之を用うれば則ち政に従いて民に恵し、之を捨つれば則ち身を修めて教を垂れ、死して後已む。其の他を知らず。」（『譚堯叟を送る序』）という思想は柳宗元の思想、生平と共通したところがあるといえよう。これからみれば彼は柳宗元を尊敬すべき政治家と見ていたと想像するのは難くない。柳開は柳宗元を韓愈に次ぐと見ていたが、王禹偁はしばしば韓柳を併稱しており、我々はこの違いは

柳開が「東郊野夫」であつたのに對し、王禹偁は自身、政界中樞に立つ政治家として政治家柳宗元を尊敬していたことによると考へてよいのではないだろうか？實際彼の思想的態度は韓愈よりは柳宗元と共通した點が多く見られる。

王禹偁は「文學の六經に本づくは、其の政を爲すや、必ず仁且つ義、議理の體有ればなり。文學の百氏に雜わるは、其の政を爲すや、貪に非ざれば則ち涉道を察することの未だ深からざればなり。」（同上）と儒學だけではなく百家の思想をも受容すべきだと考へており、この態度は柳宗元の「議論は今古に證據し、經史百子に出入す。」（韓愈「柳子厚墓誌銘」）「浮圖誠に斥く可からざる者あり、往往『易』、『論語』と合し……孔子と道を異にせず、……吾の取る所の者は『易』、『論語』と合す、聖人復た生まると雖も、得て斥く可からざるなり。」（柳宗元「僧浩初を送る序」）の態度と同じなのである。儒學だけを思想的形成の基盤とした韓愈はこの序のなかで「退之、其の外を忿りて其の中を遣る、是れ石を知りて韞玉を知らざるなり。」と批判されており、王禹偁が「貪に非ざれば則ち涉道を察すること未だ深から

ず」というのは思想的態度において韓愈よりも柳宗元の立場に近いことを示そう。

田錫や、王禹偁のこの自覺は後の世代の人々の共感を引き起こし、影響を與へている。范仲淹は「贈兵部尚書田公墓誌銘」を書き、「嗚呼、田公は天下の正人なり。……嗚呼、賢なる哉、吾は得て之に見えず。」と言ひ、司馬光には「田諫議の碑陰に書す」があり、蘇軾は「田表聖奏議序」を作り次のように言っている。「太平興國より以來、咸平に至るまで、天下大いに治まり、千歳に一時なりと謂う可きなり矣。而るに田公の言、常に不測の憂近く朝夕に在るが若きは、何ぞ哉？古の君子は必ず治世を憂ひ、而して明主を危ぶみ……（以下略）」また、蘇軾の王禹偁にたいする評價は「漢の汲黯、蕭望之、李固、吳の張昭、唐の魏鄭公、狄仁傑の如きは皆身を以て義に徇じ、……色を正して朝に立てば、則ち豺狼狐狸自ら相吞噬す。故に能く禍を未だ形れざるに消し、危を將に亡びんとするに救う。……故翰林王公元之、雄文直道を以て當世に獨り立ち、以て此の六君子に追配するに足る者なり。」（「王元之畫像贊」というものであり、やは

り田錫に對する評價と相通ずる。ここで我々は容易に范仲淹の政治的自覺の宣言「天下の憂いに先んじて憂う。」（『岳陽樓記』）を思い浮かべることができよう。後の士大夫が田錫に共鳴したのはまさに彼の政治的自覺とその有爲の精神においてなのである。范仲淹の言葉は田錫の政治的自覺を受け継いだものにほかならず、こう見て來ると田錫は宋代士大夫の政治的自覺の先驅ということができよう。宋代、范仲淹が柳宗元のために永貞事件を辨じた嚆矢であるのは、おそらく彼の政治的自覺と關係があり、べつに故なきことではない。しかし、後にみるように司馬光、蘇軾らが田錫、王禹偁に共鳴し、その政治的自覺を繼承しながらも、范仲淹とは逆に柳宗元を批判するにはまた別に理由がある。宋代士大夫の政治的自覺には二つの側面があるからなのだ。一つは有爲の精神であり、一つは道學思想の成熟に伴って強まった名分思想である。有爲の精神を重視すれば、柳宗元もまた尊敬すべき人物であるが、名分思想の立場に立てば、王叔文一黨として容認すべからざる者となる。このため、政治家柳宗元に對する見方は單純なものではないが、

大勢が柳宗元の批判に傾くのは、宋朝の強い中央集權、皇帝獨裁體制の下で生きる士大夫は名分を輕視することができないからであらう。

2 初期道學名分思想と柳宗元

では道學的立場からは柳宗元はどのように見えていたのだろうか？ 定めし批判があらうと思われるかもしれないが、柳開、穆修にはまだ柳宗元を批判する言葉はみられず、道學の先聲と稱される孫復、石介にあってもまだほとんど批判していないのだ。現在の四庫全書に收める『孫明復小集』は『蓋し『宋文鑑』、『宋文選』諸書より鈔撮して成る、十に一をも存さず。然れども、復の集、久しく佚われたれば、此を得て猶お其の梗概を見る』（『四庫提要』）ものであるが、この中には柳宗元に關する言論はなく、失われた孫復の文の中に柳宗元を批判するものがあつたとも想像しにくい。また孫復の影響を強く受けた石介は柳宗元に高い評價を與えているのである。柳宗元の柳州での政治について『劉摯『韓吏部傳論』に曰く：宗元民に德有り、豈羅池に靈無き

者ならんや？（韓）吏部、之を碑とす、何れの所か可ならざる？と。介此に於いて吏部の是なるを知る也。」「（辨謗」といって劉槩の論に全面的に同意して柳宗元に尊敬を表し、永貞事件に關しては「咄咄、宗元、權に附し官を邀う。^{なんじ}而の始節を觀るに、豈完からずと爲さん？終有ること能わず、今に至るも痕癥たり。」「（祖擇之を送る序）」と言ひ、同情をしているようだ。

しかし、韓愈に對する尊重と道學思想の成長に従ひ、又韓愈の『順宗實錄』や「永貞行」が激しく王叔文一黨を譴責したために、宋人は柳宗元批判に傾斜していく。おそらく、その最初のものは宋祁（九九八—一〇六二）が『新唐書』の中で行ったものである。そうではありながら、宋人の政治家柳宗元に對する見方は批判一邊倒の單純なものとはならなかったようだ。

『新唐書』はだいたい慶曆四年（一〇四四）頃、編纂を開始し、嘉祐三年（一〇五八）に列傳を完成している。列傳は宋祁の手に出るとは言つても、正史である以上、一定程度、當時の普遍的な見方を反映しているはずである。また『新

唐書』は周知のように『舊唐書』に對する批判として、名分を明らかにする春秋の筆法を以て書かれたものである。

さてその『新唐書』と『舊唐書』の「柳宗元傳」を比べてみると、柳宗元評價が厳しくなっていることとともに、『新唐書』の最も大きな變化は多くの柳文を取り入れていることである。『舊唐書』が「柳宗元傳」の中に柳文を採用していないのは、五代の時期には、柳文を集められなかったためであろうが、『新唐書』が柳文を選択する際には、きつとその基準があつたはずである。宋祁が「柳宗元傳」に取り入れた柳文は「蕭翰林俛に與うる書」、「許京兆孟容に寄する書」、「貞符」、「懲咎賦」の四篇である。宋祁は韓愈、柳宗元の文を好み、『新唐書』を書くにあたって多くの韓柳文を用いたが、彼の「柳宗元傳」はこの四篇の文がその大部分を占めており、異様な多さと言わざるを得ない。とりわけ注意に値するのは「貞符」を入れたことである。顧炎武は「昔人、宋子京は對偶の文を喜ばずと謂う。其の史を作るや、有唐一代遂に一篇の詔令も無し。德宗與元の詔の如きは書に錄されず、徐賢妃「諫太宗疏」、狄仁傑「諫武后營

大像疏」は僅かに寥寥數言のみ。而るに韓愈「淮西を平らぐる碑」となれば則ち全て之を載す。夫れ史は以て事を記し、詔疏は國事の大を俱す。反って碑頌にしかざらんや？柳宗元「貞符」は乃ち恩を希い罪を飾るの文なり、(司馬)相如の「封禪頌」とは異なれり矣。之を載するは尤も識無しと爲す。『日知錄』『新唐書』と指摘し批判しているのだが、しかし逆にこのようであるからには、ことさらに對偶の文である「貞符」をいれたのは理由があるはずである。これら四篇の文を讀んでみると、「貞符」を除いて皆王叔文一黨に参加したことを後悔する内容なのである。ところで、宋祁は「宗元久しく汨振し、其の文を爲るや、思い益ます深し。嘗て書一篇を著し「貞符」と號す。」と述べてから、「貞符」を引用しており、「思益深」という言葉からみて、宋祁は「貞符」を一つ思想作品とみているのであって、「恩を希い罪を飾るの文」とはみなしてはいないと思われる。「貞符」は表面上は、唐朝が「命を生人の意に受」けたことを論述しているのだが、其の要旨は疑いもなく「受命は天にせず、人にす」るのだという柳宗元の基本的政治

思想なのである。ではなぜ宋祁はわざわざ「貞符」をとつたのか？

柳宗元が終に中央に返り咲けなかった理由について『舊唐書』はこの點を述べない。宋祁は「衆は其の才の高きを畏れ、復た進むを懲刈す。故に力を用うる者無」かったからだと言う。しかも『新唐書』は簡潔を旨としたはずなのに柳宗元の才能については再三にわたって述べている。「宗元、少時進むを嗜み、功業就す可しと謂う。既に廢に坐しては遂に振るわず。然れども、其の才は實に高く、名は一時を蓋う。」と言ひ、さらに贊では「彼若し匪人に傳かず、自ら材猷を勵かば、名卿才大夫爲るを失わざるを、惜しい哉。」と言う。この記述から見て、宋祁の指す「才」とは文才のことだけではなく、むしろ主には政治的才能を指しているのである。ところが、『舊唐書』では「史臣曰く、貞元、太和の間、文學を以て摯紳の伍に簞動する者は、宗元、禹錫のみ。其の巧麗淵博、屬辭比事、誠に一代の宏才なり。如し之をして帝載を詠歌し、王言を翻藻せしめば、以て古賢に平しく揖し、氣をもて時輩を呑むに足らん。」という

ように専ら柳宗元の文才を評價しており、『新唐書』とは大いに徑庭がある。このように見れば、『新唐書』において柳宗元は文學者として理解されているばかりでなく、『沾沾たる小人』（『新唐書』柳宗元傳贊）王叔文黨に参加したとはいえ、明らかに優秀な政治家と見なされているのである。このように考えて始めて宋祁が特に「貞符」をとった理由が理解できるだろう。つまり、名分論からの批判はありつつも、柳宗元の政治的才能と思想は重視されていたことになる。

石介と進士及第同年の歐陽修は柳宗元を韓門の罪人と痛罵しているが、現在、歐陽修の詩文には一篇も永貞事件に言及したものはない。しかし、非常に『春秋』を重視し、『孔子何すれぞ』『春秋』を修む？名を正し以て分を定め、情を求め實を責め、是非を別ち、善惡を明らかにす、此れ『春秋』の作る所以なり。』（『春秋論』）のように考え、『新唐書』編纂にも携わった彼は、おそらくその名分論的立場から政治家としての柳宗元を承認できなかったであろう。ただし、彼が韓柳の併稱を拒否し、後世稱して韓柳と爲

宋人の見た柳宗元（副島）

すは、盡く流俗の相傳なり。』（『集古錄』卷八「唐柳宗元殷若和尚碑」跋尾）、唐より以來、文章を言う者は惟だ韓柳のみ。柳は豈韓の徒ならん哉、眞に韓門の罪人なり。』（同上「唐南嶽彌陀和尚碑」跋尾）と言うのは、必ずしも永貞年間の柳宗元を名分論から批判的にみているためではない。何故なら、『韓柳は』其の道爲るの同じからざること、猶お夷夏のごときなり。』（同上「唐柳宗元殷若和尚碑」跋尾）蓋し世俗は其（柳）の學ぶ所の非を知らず（同上「唐南嶽彌陀和尚碑」跋尾）と言っているからである。つまり、彼にとっては柳宗元の思想が問題なのである。

大體の上において、仁宗の慶曆前後は政治家柳宗元に對する評價はやや複雑で、一定の見解というものはないようである。これは慶曆年間儒學がようやく分化しはじめた時期だからであるようだ。その一は理學思想であり、一は經世致用を旨とする功利思想である。この時期、一人の思想の中にもこの二つの要素が渾然としてあり、時には矛盾しているようにさえみえるのだ。この時期の思想狀況を象徴的に代表するのは李觀（一〇〇九—一〇五九、字は泰伯、

である。『宋史』本傳に記載するところは極めて少なく、李觀は政治家としても、思想家としても、大きな地位を占める人ではないが、その思想は王安石らの先驅といえるものである。

李觀は范仲淹の推薦で試太學助教となり、『宋元學案』は范仲淹の門下に入れている。歐陽修より二歳の年下、王安石よりは一二歳の年長である。李觀の門人の中からは鄧潤甫などが出て、後に王安石の新法に参加している。彼は「周禮致太平論」を著わし、宋代功利思想の先驅者ともいふべき人物であり、『四庫提要』によれば「其の治體を論ずる、悉く實用に見る可し。故に朱子は、觀の文、實に經に得る有り」と謂う。⁴⁴『肝江集』提要のことは彼の文集の目錄を一瞥すればただちにわかるであらう。そして、彼は韓愈を尊重しながらも、政治思想について言えば、韓愈とは大きく隔たっており、却って柳宗元と相近いのだ。それは、民本思想と功利思想である。李觀の思想も孟子の民本思想を繼承するものであり、彼が⁴⁵「嗟乎！天、斯の民を生むや、能く民の爲に君を立て、而して君の爲には民を養う能わず、

君を立つる者は天なり。民を養う者は君なり。天命の一人に私するには非ず、億萬人の爲なり。民の歸する所は、天の右する所なり。民の去る所は天の左する所なり。」「安民策」二」と主張する時、柳宗元と非常に近い地點にいるのは間違いない。そしてこの思想が「愚、竊かに儒者の論を觀るに、義を貴ばず利を賤しまぬもの鮮なし。其の言、道德教化に非ざれば則ちこれを口より出ださず矣。然れども、「洪範」八政、一に曰く食、二に曰く貨、と。孔子曰く、食を足らしめ、兵を足らしむれば、民、之を信ず矣、と。是れ則ち治國の實は、必ず財用に本づくなり。」「富國策」一」という功利思想につながるのは當然でもあらう。したがって彼の思想は一面で、利を言うを恥とする理學思想とは相對するものである。

ところが、李觀の政治家柳宗元に對する評價は、「子厚、韓の奇を得るも、正に於いては則ち劣れり矣。王叔文に黨するを以て、朝に善士爲るを得ず。：子厚、（張）晦之の若きは皆凡人に非ず、惡名を被り、自ら新たならんと欲すと雖も、死期至れり矣。」（李觀に答うる書）と批判的なので

ある。李觀は一方では確かに孟子、柳宗元の系譜に連なる民本思想を繼承する功利思想家なのだが、同時に『春秋』を重視し、名分思想をも強烈に有しているのだ。彼に典型的に見られるように、この時期は柳宗元に對する批判が一方では生まれながら、彼の政治思想への自覺的な評價と繼承も生まれつつあり、それが混沌と未分化の状態にあったようである。

3 北宋三大領袖と柳宗元

次に北宋政壇の三大領袖、王安石、司馬光、蘇軾と柳宗元の關係について検討してみたい。彼等の時代に至って、宋人の儒學思想はようやく名分思想と功利思想に分化し、旗幟を明らかにしたようである。この他さらにやや立場を異にする蜀學がある。この三人の領袖は北宋におけるそれぞれの思想傾向と政治的態度を代表すると考えられるから、彼等の柳宗元に對する評價はある程度この時代の一般的傾向を反映しているだろう。

王安石（一〇二一—一〇八六）は慶曆二年（一〇四二）の進士、

宋人の見た柳宗元（副島）

新法黨の領袖として幾多の改革を行った。北宋の功利思想を代表する政治家といえよう。彼の柳宗元に關する言論は少ないが、彼の見方を窺うことは十分可能である。彼の「柳宗元傳を讀む」に言う。

「余、八司馬を觀るに皆天下の奇材なり。一たび叔文の誘う所と爲りて、遂に不義に陷る。今に至るも士大夫の君子爲らんと欲する者、皆道に羞じて之を攻むるを喜ぶ。然れども此の八人は既に困じ、世に用いらるる所無きも、往々、能く自強して以て後世に列せらるるを求め、而して其の名、卒に廢せず。而るに所謂君子爲らんと欲する者、吾れは多く其の初を見るのみ。其の終に能く世と俯仰する母く、以て自ら小人に別つ者を要めては少なきのみ！復た何ぞ彼を議せん哉？」

柳宗元傳を借りて、自己の政治的信念を表明していると考えられるこの一文は非常に王安石らしいものである。ここから讀み取れるのは、一つは彼は八司馬の政治的才能に高い評價（天下の奇才）を與えていることである。一歩進めて言えば、文字面の上では言わないが、永貞年間（一〇一七—一〇二一）の政治

自體には積極的評價を與えていとみられる。そうでなければ、「天下の奇材」と言うはずがないからである。つまり、柳宗元を尊敬すべき政治家と見ていることになる。第二は當時、士大夫の普通の見方は王叔文一黨に批判的であったことである。そして王安石も不義であると認めている。ただし、王安石は「遂に不義に陥る」と言うにもかかわらず、この一篇の要旨は決して柳宗元らをおとしめ、批判することにあるのではない。そうでなければ、王安石がわざわざ「柳宗元傳を讀む」などという文章を書く理由がないからだ。王安石の柳宗元に對する評價は多面的で、王叔文一黨に参加したことをもって單純に非難しているわけではないのである。その他、例えば韓愈と柳宗元を比較して「孔子の死してより久しくして、韓子作り、聖人を百千年の中に望みて卓然たり。獨り子厚の名、韓と並ぶも、子厚は韓の比に非ざるなり。然れども其の文は卒に韓に配して以て傳えらる、亦豪傑畏る可き者なり。」（「上人書」というのは道統と文章の二つの側面から評價したものだ。ならば政治家としての評價は何によるのだろうか。この點を確證す

るのは難しいのだが、推測は可能だろう。そしてそれは韓愈、柳宗元それぞれが宋代士大夫に與えた影響の違いに關わってくるはずである。王安石は韓愈を尊重もしているが、一面韓愈を度々批判し、又あからさまに諷刺する詩もある。韓愈に對する批判は「伯夷」、「原性」、「性説」などがあり、これらは韓愈の論說に對する個別的な論駁である。韓愈を諷刺しているのは即ち「韓子」（文集卷三四、宋李壁『王荊公詩注』卷四八）である。李壁の注に言う。

「公の此の詩を觀るに、尙お退之未だ道の眞を識らずと謂う。余臨川に在りて之を聞けり、曾氏の子弟、南豐の語を載せて云く、介甫前人を非とすること盡くせり、獨だ黃帝、孔子未だ非とせられざるのみ、と。譏りて、其の人を非とすることの太だ多きや、此の如き詩に見る可きなり。」

王安石は韓愈の詩句「憐れむ可し、益無く精神を費せり。」（「崔立之評事に贈る」）をパロディにして韓愈を諷刺するという辛辣なことをしている。（「紛紛と盡くし易し、百年の身、世を擧げて、何人の道の眞を識らん？力めて陳言を去り末俗に誇る、憐れむ可し、補無く精神を費せり。」）ところが、この

ような王安石に柳宗元批判の詩文がほとんど皆無であるというのは、不思議なことといつてよい。では逆になぜ王安石は批判の矛先を韓愈に向けるのだろうか？個別的な論駁の背後にある王安石の韓愈観を探るのは困難だが、章士釗の言うように、⁴⁶朱熹の言葉を参考にしてもよいかもしれない。朱熹は道學の大成者とはいっても、その韓愈批判は宋代功利思想家の立場と共通し、或いは最も先鋭に功利思想的立場から韓愈を批判しているからである。朱熹の韓愈批判は多いが、その論點はおおむね一つに盡きる。一例を挙げれば

『韓退之のごときは道の大用をこのようであるとはわかつてゐるが、實際に努力するところはなかった。彼は當初からそもそも官職にありつきたいと思つてゐるだけで、いつもそういう心でしかなかった。ただ言葉が六經に似るようにするだけで、道を傳へてゐると考へてゐるのである。……彼が官僚となり政治に臨むようになって、國家のために仕事をしようというのでもなかったし、たいして稱賛すべきところもなかったのである。じつは官職にありつきた

いと考へてゐるだけだったのだ。』（『朱子語類』卷一三七戰國漢唐諸子）⁴⁷

と言う。要するに朱熹の批判は韓愈は力を盡くして道を宣揚するが、經世致用に有用な議論もなく、政治的な實踐は何もないことにある。王安石の「韓子」一首もこの點から韓愈を批判したものはあるまいか？また朱熹は韓愈と柳宗元を比較して

『柳子厚は失態があるが、かえつてまた（韓愈より）優れている。君主の恩澤を民衆に施そうとすることなどをやらねばならぬと言つてゐるのだ。退之は官僚になろうとするばかりで……（以下略）』（卷一三七戰國漢唐諸子）

と言つており、功利思想の立場から見た韓愈と柳宗元の評價の違いは明らかだろう。柳宗元が永貞年間、元和年間を問わず一貫して、安民を旨として多くの政治改革を行ったことを評價してゐるのである。これは朱熹の見方ではあるが、朱熹にしてこの言ありとすれば、王安石にしても内心、柳宗元の生平、事跡は尊敬するに足ると考へたのではないだろうか？憶測に過ぎないが、我々は王安石の爲すこと有

らんとする精神を考えてみれば、容易に彼がわざわざ「柳宗元傳を讀む」を書き、度々韓愈を批判しながら柳宗元に關しては沈黙していたわけがわかるように思う。しかし、王安石は有爲の精神にあふれた功利思想家であると同時に、無論のこと名分思想をも有しており、なによりも中央集權體制の下で官僚となつてゐるからには、名分論を無視しないし輕視するわけにはいかなかったはずである。おそらくこれが王安石が積極的には政治家としての柳宗元を評價しなかつた理由の一つである。

司馬光（一〇一九—一〇八六）は登寶元年（一〇三八）進士甲科に及第し、後年舊法黨の領袖として政界に重要な地位を占める。『資治通鑑』を編纂したことで、後世には史家として有名であるが、『資治通鑑』編纂の目的は政治に有用たらんとすることであり、當時にあつては彼も何よりもまず一人の政治家に他ならなかつた。司馬光は政治家として王安石と對立するのみならず、その思想もまた王安石とは相容れないものである。王安石が孟子を推重し、聖人とまで見なすのに對し、司馬光は「疑孟」を書き、王安石が『周禮』

を尊重して新法の指針としたのに對しては司馬光は神宗に「昔、劉歆此の法『周禮』を用い、以て王莽を佐け、農商をして業を失ひ、市道に涕泣し、卒に天下を亡しむるに至る。安んぞ聖朝の法と爲すに足らんや？」（『邵氏聞見後錄』卷三）と密奏したと傳えられる。彼らの政治的對立は思想的根源から生まれてきたものである。その司馬光が「彼の數君子（孟、荀、揚、王、韓、孫、柳、張、賈は誠に大賢なり。然れども道に於いては殆ど駁にして不粹なる者無き能わず。」（『陳充祕校に答ふる書』）と言う時、これは疑いもなく、柳宗元を指してこのように言つたものである。なぜなら司馬光は「博學にして通ぜざる所無」きも、釋老を喜ばず、曰く、其の微言は吾が書よりは出づる能わず、其の誕、吾は信ぜず、と。（『蘇軾「司馬溫公行狀」』）というふうであつたからである。（ただし實は司馬光の思想は道教の深い影響を受けてゐるのだが、それは彼の思想の淵源と構造とでも言うべき問題になるのでここでは立ち入らない。）そして司馬光は王叔文一黨に對して次のように書いてゐる。

「叔文、譎詭にして計多し。」（『資治通鑑』卷二二六頁元一）

九年六月己未條)

「日び與に遊處し、蹤跡は詭秘し、其の端を知る者有るなし。藩鎮或いは陰に資幣を進め、之と相結ぶ。」(同上)

「謀議唱和し、日夜汲汲と狂えるが如し。互いに相推奨して曰く伊(尹)、曰く周(公)、曰く管(仲)、曰く(諸)葛(孔明)、と。偶然と自得し、天下に人無しと謂う。榮辱進退、造次に生じ、惟だ其の欲する所のみ、程式に拘われず。」(同上卷永貞元年正月壬戌條)

「上疾みて久しく愈えず……中外危懼す。早く太子を立てんと思ふも、王叔文の黨、大權を専らにせんと欲し之を聞するを惡む。」(同上年三月戊子條)

それでは司馬光は柳宗元を小人の黨友と見なしているのだろうか? 「君は明、臣は忠、父は慈、子は孝なるは人の分なり。……人の分を失えば必ず人殃有り。」(「迂書」土則)という司馬光の思想からすれば、王叔文一黨は譴責されねばならなかった。それは上の『資治通鑑』の記述にもあらわれている。ところがその實、司馬光は時として王叔文らの實績を稱賛しているのだ。

宋人の見た柳宗元(副島)

「公(司馬光)慨然と之を争いて曰く、先帝の法、其の善なる者は百世と雖も變う可からざるなり。……(唐)德宗晩年、宮市を爲し、五坊の小兒は暴横にして、鹽鐵使の月進(錢)は羨餘せり。順宗即位して之を罷む。當時悅服し、後世稱頌し、未だ或いは之を非とする者有らざるなり、と。」(蘇軾「司馬溫公行狀」)

宮市、五坊の廢止は『資治通鑑』の中でも順宗の施策として記述されているが(『上東宮に在りて皆其の弊を知る。故に即位して首に之を禁ず。』(永貞元年正月甲子條)、司馬光はその背景を記すのを忘れてはいない。)(叔文)間に乘じ、常に太子の爲に民間の疾苦を言う。)(貞元一九年六月己未條)だから子細に『資治通鑑』を読むならば、永貞改革の諸策が實は王叔文一黨の手に出たものであることがわかるのである。もちろん、司馬光もわかった上で書いているのだ。これに加え更に重要なのは『資治通鑑』元和十年の記述の中に特に柳宗元の「梓人傳」と「種樹郭橐駝傳」を引用していることである。そして評語を附して「此れ其の文の理有る者なり。」と言うのだ。これを見ると、司馬光は表

面上は王叔文一黨を名分にもとつた小人と見なしているようだが、その實彼等の政策を評價し、柳宗元の政治思想をも重要視しているようである。司馬光の政治思想の根本は

「臣、天子の職を聞くに、禮より大なるは莫く、禮は分より大なるは莫く、分は名より大なるは莫し、と。何を禮と謂うや？紀綱是れなり。何を分と謂うや？君臣是れなり。何を名と謂うや？公侯卿大夫是れなり。」（『資治通鑑』卷一威

烈王三三年條）という名分思想であり、蕭公權は司馬光の思想は「民を貴しと爲す古義は已に能く喩る所に非ず、而して頗る意を君臣の名分を闡明するに致す。」（『ものと云う。だから彼は「疑孟」を書き孟子を批判したわけだが、このように名分思想を代表する司馬光が柳宗元の政治的實績、思想に認める所があるとすれば、宋人にとって政治家としての柳宗元の存在は小さなものではなかったはずである。

蘇軾（一〇三六—一一〇一）も舊法黨の領袖の一人であるが、その思想は司馬光と必ずしも同じではない。彼の政治家柳宗元に對する見方は次のようであつた。『唐柳宗元、劉禹錫、叔文の黨に陥いらざら使めば、其の高才絶學、亦

以て唐の名臣爲るに足らん矣。」（『續歐陽子朋黨論』）この見方は宋祁と大差なく、新しい觀點はない。しかし全體的に言えば、蘇軾の柳宗元に對する評價は厳しいものがある。例え

ば「宗元の意は此を以て自ら其の二王に従うの罪を解説せんと欲するなり。」（『經進東坡文集事略』卷五七「伊尹を辯ずる説」）

「柳宗元敢えて誕妄を爲し、之に居りて疑わす。呂溫、道州、衡州と爲り、死に及びて二州の人之を哭して月を逾え、客舟の此に過る者、必ず呱呱然たり。子産と雖も此には至らざるに、溫何を以てか之を得ん？其れ溫の弟恭も亦賢豪絶人なる者と稱す。又云く、恭の妻は裴延齡の女なり、と。孰か士君子の肯て裴延齡の婿と爲る者有らん乎？柳宗元と（王）伾、叔文の交り、蓋し亦た延齡の姻に差らざるなり。」（『東坡志林』卷四）

（揚）子雲、尤患に臨み顛倒失據す、而して子厚尤も觀るに足らず。二人當に斯文に媿有るべきなるか！」（『稗海本『東坡志林』卷九）

そして柳宗元を指して小人とさえ言うのである。〃此れ所謂小人の忌憚無き者なり。〃（江淳禮秀才に與うる書）⁴⁹このような見方は歐陽修や司馬光らと共通する名分論から出てくるものと理解してよいだろう。蘇軾の名分論は「學士院試、春秋は天下の邪正を定むるの論」「後正統論」などに見え、いずれも前二者と一脈相通するものである。又、蘇軾は大體の上において柳宗元の思想に對しても否定的なのだが、一つには名分論の觀點から政治家としての柳宗元を承認できなかったためであらう。しかし反面、蘇軾の思想は柳宗元と相近い所もあるのである。蘇軾も司馬光と同じく王安石の功利思想を攻撃したが、司馬光と異なるのは、蘇軾は司馬光よりも忠實に孟子の民本思想を繼承している點である。彼は「神宗皇帝に上る書」の中で「人主の恃む所の者は人心のみ：人主、人心を失えば則ち亡ぶ：是を以て君子未だ行事の是非を論ぜず、先ず衆心の向背を觀る。〃と述べて政治の要諦を説いているが、これは孟子を祖述したものに他ならない。柳宗元同様、民本思想を繼承しながらも、蘇軾が功利思想を排斥したのは、それもやはり孟子

の思想〃何ぞ必ずしも利を曰わん？亦だ仁義有るのみ矣。〃（梁惠王上）からすることである。蘇軾は比較的忠實に孟子を繼承しており、その點で儒學思想を新しく展開させた王安石、司馬光よりも保守的であり、道德主義とでも稱すべきものである。例えば〃夫れ國家の存亡する所以の者は道德の淺深に在り、而して強と弱には在らず。〃（神宗皇帝に上る書）と言ひ、傳統的德治主義を奉じている。蘇軾の民本思想は柳宗元の政治的信條と接近しているのだが、柳宗元は時に民本のあまり禮樂を輕視するところがあり、そのため禮樂を德治の根本と考える蘇軾は柳宗元を批判するのである。結局のところ、王安石、司馬光が柳宗元を批判しながらも、認めるところがあるのに對し、蘇軾が政治家としての柳宗元に冷淡であるのは政治というものについての根本的な考え方の差によるものであるようだ。道德を政治の根本とする蘇軾からすれば、いかに良い政策を實行したとしても、柳宗元らの行爲は認むべからざるものであった。北宋における柳宗元の政治家としての評價は基本的には以上の通りである。大體において、慶曆以前はまだ柳宗元

に對する批判は生まれておらず、(少なくとも明確ではない)、評價はかえって意外と高いのである。しかし以後名分論の擡頭に從つて批判が現れてくる。批判はあり、またその程度は色々であるが、宋の士大夫は基本的に政治家柳宗元を認めているのである。

4 柳宗元への評價と影響

以後も、政治家柳宗元に對する二つの評價は共に受け繼がれていく。功利思想を主とする人々は柳宗元を重視し彼を辯護する方に傾き、理學や名分論を主とする人々は、批判にはしるのである。ただし、宋朝の南渡以後は、理學思想が隆盛となる關係で大勢は批判に傾くようである。しかし、理學と相對立した永康、永嘉學派の中に我々は柳宗元の影響を見出すことができるだろう。以下、北宋末以後の狀況を見てみたい。

崇寧三年(一一〇四)、徽宗は柳宗元を文惠侯に封する勅書を下す。告詞には「功德は民に在り、龍城は遠しと雖も、其の民を鄙とせず。爰に教條を出だし、動に禮法を以

てす。家は富みて業有り、經學師有り。風行われ俗成り、田里悦喜す。」「(初封文惠侯)と述べている。この勅は「斯(柳州)の民の欲に從う」ものである以上、當然のごとく柳州での政績に言及するだけで、永貞年間の事情には觸れないが、今は觸れない事に注意しておきたい。

この時期の理學思想家の柳宗元に對する評價は黨派的な邵博(一一二五八邵雍の孫、伯溫の次子)の言説に窺うことができる。「(宗元)輕侮し譏議を好むこと尙お此の如くなれば、則ち尙書郎爲りし時、知る可きなり。(韓)退之、自ら貴重せずと云うは、蓋し其の資此の如きを云う。」「(聞見後錄』卷一四)と言ひ、また柳宗元を小人と貶する蘇軾の「江淳禮秀才に與う」を引いて「予、學者は知らざる可からざるなりと謂う」(同卷一五)と蘇軾の柳宗元批判に同意している。

同時期の功利思想的政治家としては汪藻(一一〇七九—一一五四)、字は彥章がいる。崇寧二年(一一〇三)に進士となり、欽宗の時、翰林學士を拜し「詔令類、其の手に出」(『宋史』文苑傳 汪藻)た信頼厚い政治家であり、軍事方面でも的確

な獻策をしている。紹興一四年（一一四四）『言う者、其の嘗て蔡京、王黼の客と爲りしを論』じたために、『職を奪われ永州に居る』（同上）ことになった彼は「永州柳先生祠堂記」を作っている。それには「先生、貞元黨に坐すこと、劉夢得と同じと雖も、夢得は昌時に會いて猶お朝に尊顯せらる、先生は未だ時君の省りみる所と爲るに及ばず、遽に元和の世に歿し、事業遂に大いには時に見われず、深惜す可き哉！」と言う。彼は柳宗元と相似た困境に陥つたために、自己の心情を柳宗元の上に託している側面もあるのだが、彼の生涯から見てもやはり有爲の政治家であるからこそ、事業遂に大いには世に見られず、深惜す可き哉！」と言うのであらう。彼は范仲淹、王安石らの延長線上に居るのである。

陳善（生卒年不詳、南北宋間の人）の『捫蝨新話』卷一二には「柳子厚功過」の條がある。この一文は柳宗元の永貞改革を口を極めて稱揚するものである。ただし『四庫提要』によれば、その書は「持論尤も踳駁多し。大旨佛氏を以て正道と爲し、王安石を以て宗主と爲す。故に宋人に於いて

は歐陽修を詆り、楊時を詆り、陳東を詆り、歐陽澈を詆り、而して蘇洵、蘇軾、蘇轍を詆りて尤も力めり、甚だしきは轍を議し神宗を曹操に比するに至る。古人に於いては韓愈を詆り、孟子を詆る。」というものであつてかなり特異な論である。このような言論をなす理由について『四庫提要』は「善、南北宋間の人、其の始末考う可からず。其の書を觀るに是非を顛倒し毫も忌憚無し。必ず紹述餘黨の子孫、志を得ずして書を著わす者なり。」と推測している。おそらくはそうであらう。

「柳子厚功過」の條では「學者今に至るも之を罪とす。」と述べており、當時も、王叔文一黨を批判する士大夫の多數を占めていたことがわかる。しかしそれとは逆に、この言論があるということは、永貞の革新が王安石らに連なる功利思想家からは高い評價を受けていたわけである。陳善は柳宗元を辯護して言う、「春秋の法、功を以て過を掩わず、亦罪を以て德を廢さず」と。これはおそらく當時の形式論的名分思想家に對する「紹述の餘黨」の柳宗元を借りた抗議であらう。それがまた「紹述の餘黨」が柳宗元を評

價する動機にもなっているはずである。

紹興二八年（一一五八）、高宗は「文惠昭靈侯に加封す」という勅書を下した。その告詞には次のように言う。

「惟れ神望河東に冠し、名は唐室に高し。其の才は以て世に命ずるに足り、其の政は以て民を裕かにするに足る。」⁵⁰

この勅は「郡人これを朝に願請し、而して使者遂に其の事を上る。朕、神の孚惠を嘉し、爰に褒封を益す。」（告詞）ものではあるが、柳州に限定された崇寧三年の勅と相比べてみれば全般的になっており、明らかな違いがある。ここから我々は政治家柳宗元の評價が北宋に比べて次第に高くなって來ていることを窺えよう。

數年後の紹興三二年、嚴有翼（生卒年不詳）は「柳文序」を書き、「史を作る者復た其の是非を審訂せず、第だ一時の成敗を以て人を論ず。故に黨人の名、洸洗す可からず。嗚呼！子厚、亦不幸を重ねと謂う可きなり矣。」と述べている。彼に關する傳記資料はなく、『藝苑雌黃』という著作を残しているだけである。だから彼の生涯、思想を詳らかにすることはできず、現存の『藝苑雌黃』も後人の改竄す

る所があり、原貌を留めていない。しかしこの書の確かな特徴の一つは故意に蘇軾を批判することである。洪邁の『容齋四筆』卷一六「嚴有翼詆坡公」の條に言う。「嚴有翼著わす所の『藝苑雌黃』、該洽有識、蓋し近世の博雅の士なり。然れども其の立說頗る東坡公を譏詆するに努む。」そして『藝苑雌黃』にはさらに「辨坡」の條まである。彼が蘇軾を非難することと、柳宗元評價との關係はわからないけれども、『四庫提要』は「宋時、說部諸家、胡仔『荅溪漁隱叢話』、蔡夢弼『草堂詩話』、魏慶之『詩人玉屑』の如きの類、多く『藝苑雌黃』の文を徵引する有り。」といい、これから見れば、上の洪邁の嚴有翼に對する評價はおそらくかなり妥當なものであるはずだ。であつてみれば、彼の柳宗元に對する見方も當時にあつて陳善ほどには矯激なものではなく、ある程度普遍的なものであつたと考えてよいだろう。

北宋人はただ消極的に柳宗元のために永貞の政治を辯護するばかりだが、陳善、嚴有翼となると明らかに積極的に辯じており、それは政治家柳宗元の評價の變遷を反映して

いるはずである。柳文に對する尊重と同じく、南宋に至って政治家柳宗元に對する尊重も重きを加えたのである。

しかし、理學思想の立場を堅持する人々は相變わらず政治家としての柳宗元を認めようとしなない。例えば王十朋（一一一—一二七二）は「永貞行に和す」詩を作り、その序に「予、少きより柳文を読むを喜ぶ、而れども其の傳を觀るに忍びず、其の名韓愈に齊しきに叔文に黨陷するを惜しむなり。退之と柳と善し、『順宗實錄』を作るに及び、未だ嘗て假借せず。公議の屈す可からざるや、此の如し。」と言ひ、文章家としての柳宗元は認めながら、八司馬に對しては非常に嚴しく、「永貞覆轍 宜しく痛懲すべし」（「和永貞行」と述べ、柳宗元についても「八州司馬、才は稱すべきも、節已に地を掃けば誰か復た矜まん？子厚年少くして躁て飛騰し、身は醜黨に陥り熏蒸に羅る。文を著し騒に擬しては愁思凝り、自ら辨白せんと欲するも終に曾げらるる莫し。王孫尸蟲 罵憎を託し、色豈に明窗の燈に媿じざらんや？」（同上）と手嚴しい。王十朋は南宋において重要な地位を占めた政治家であり、毎に諸葛亮、顏眞卿、冠準、

宋人の見た柳宗元（副島）

范仲淹、韓琦、唐介を以て自ら比」（『宋史』王十朋傳）し、
「朱熹、張栻も之（主）を雅敬」（同）し、後世からも「十朋朝に立ちて剛直、當代の偉人爲り。」（『四庫提要』『梅溪集』提要）と評されているほどだが、その思想の淵源に就いて見れば、「先生の學、一に正に出づ。孔孟より下、惟だ韓文公、歐陽公、司馬公をのみ是れ師とす」（『宋元學案』卷四四趙張諸儒學案）るのである。彼が政治家としての柳宗元を認めない理由は自ずと明らかであろう。このような理學の名分論からする批判は枚舉に耐えないので、以後は一々擧げないことにする。

南宋の功利思想の中心は浙江にあり、所謂金華、永嘉、永康の諸派がある。とりわけ、葉適（一一五〇—一二二三）が重要である。字は正則、永嘉の人、淳熙五年（一二七八）の進士であり、「學術の會、總て朱、陸の二派爲り、而るに水心（葉適）其の間に斷斷たり。遂に鼎足と稱せ」（『宋元學案』卷五四水心學案序錄）られたのであり、南宋功利思想の代表者の一人といつてよい。彼もまた民本思想を根本とし「雅に經濟を以て自ら負う」（『宋史』儒林傳 葉適）のであ

った。柳宗元について彼は次のように記している。

「僕舊に柳子厚の文を読み、獨り其の婁圖南を送るに序して極めて理有るを愛す。世の君子の其の道に畔し以て異學に従い、勞して成無き者を使って以て自ら鏡せしむ可し。」

〔戴少望に與うる書〕

それでは葉適が柳宗元のこの文章を愛讀した理由はどこにあったのだろうか？柳宗元の「婁圖南秀才の淮南に遊び將に道に入らんとするを送る序」の要旨は「幸いにして堯舜孔子の志を求むるを好まば唯だ得ざるを恐れ、幸いにして堯舜孔子の道を行うに遇えば唯だ慊らざるを恐る、是の若くにして壽ならば可なり。之を求めて得、之を行いて慊る、天と雖も其れ誰か悲しまん？今將に呼嘯を以て食と爲し、咀嚼をもって神と爲し、無事をもって閑と爲し、不死をもって生と爲さば、則ち深山の木石、大澤の龜蛇、皆老て久し、其れ道に於いて何如ならんや？」というにある。これから葉適がこの文章を愛讀したのはすなわち柳宗元の有爲の精神に共鳴したためであること、見るに足ると思う。葉適と對立した朱熹でさえ、柳子厚には失態があるが、

（韓愈よりは）優れている。君主の恩澤を民衆に施すことなどはやらねばならぬと言っているのだ」（『朱子語類』卷一三七）とその有爲の精神を認めているのであるから、同じ精神を持つ宋の功利思想家は柳宗元に共鳴し古文復興の中でこの精神を繼承していったはずである。蕭公權は「宋代政治思想の重心は理學になく、理學と相對抗した功利思想にある。」⁶⁰と云う。そうであれば、柳宗元の民本思想と有爲の精神が宋代士大夫に對して與えた影響はけっして小さくなく、宋初來、多くの政治家の共感を引き起こし、彼等の政治的自覺を育てたのである。しかし名分思想もまた宋朝の中央集權體制の下で強化されてきており、功利思想家といえども名分論を脱し切れるものではない。このため積極的に批判もしないが、敢えて積極的に王叔文一黨の活動を承認もしないのである。この他、もう一つの理由を擧げるなら、黨爭の弊に直面していた宋代の士大夫たちは黨派的活動に批判的であつたためだと思われる。これらが功利思想家に王叔文一黨に關する言論の少ない理由であらう。

注

- (1) 羅根澤『中國文學批評史』第三冊四七頁、五九頁。(上海古籍出版社)
- (2) 郭紹虞『中國文學批評史』三二〇頁(上海書店民國叢書本)。
- (3) 『唐宋文學論集』所收「宋代散文的風格」(齊魯書社)
- (4) 羅氏同上書三五頁—三六頁。
- (5) 柳宗元『河東先生集』附錄卷上。現存の田錫『咸平集』には未收。
- (6) 「唐柳先生集後序」
- (7) 『文苑英華』中華書局出版説明。
- (8) 『唐文粹』卷六二、六四に各一篇を収める。
- (9) 王禹偁『再答張扶書』、陳彭年「故散騎常侍東海徐公集序」(『徐公文集』卷首)、石介「上趙先生書」に見える。
- (10) 羅氏上掲書五九頁。
- (11) 『池北偶談』卷一五「皇甫湜評韓文」條。
- (12) 『河南穆公集』付録「穆參軍遺事」引「言行錄」
- (13) 宋 魏泰『東軒筆錄』卷三。同じ逸話を邵伯溫『易學辨惑』、朱辯『曲洎舊聞』卷四にも載せるが、それによると穆修は相國寺で柳宗元ばかりでなく韓愈の別集も賣っていたようである。眞偽のほどはよくわからないが、彼が歐陽修よりも先に韓愈の文章を集め、校訂していたのは確かである。おそらく兩方を賣っていたのであろう。
- (14) 『漢魏六朝唐代文學論叢』所收「韓愈散文的風格特徵和他宋人の見た柳宗元(副島)

的文學好尚」二四三頁、二四八頁。

- (15) 例えば、沈晦「四明新本柳文後序」、嚴有翼「柳文序」、陸之淵「柳文音義序」、張敦頤「韓柳音釋序」など諸注者は皆柳文の難解さを言い、朱熹でさえも「文之最難曉者、無如柳子厚。」(『朱子語類』卷一三九論文上) と言う。
- (16) 『池北偶談』卷一七「柳開論文」。
- (17) 『宋史』穆修傳「一時士大夫稱能文者必曰穆參軍。」
- (18) 『池北偶談』卷一七「柳仲塗集」。
- (19) 排佛思想と彼の柳宗元評價とどのような關係にあるのかは未詳。また穆修には祕演という友人がいた。その祕演にしても「詩を善くし、復た辨は博、好んで天下の事を論じ、自ら浮圖は其の服にして儒は其の心なりと謂う。」(尹洙「浮圖祕演詩集序」) 僧侶であった。この頃は道學思想がまだ未成熟で、排佛といってもまだ後ほど先鋭ではなかったようだ。
- (20) 「送李侍禁序」等。
- (21) 別集中には簡古を主張した議論は見たらない。また沈括『夢溪筆談』卷一四の逸話「穆(修)張(景)嘗同造朝、待旦于東華門外。方論文次、適見有奔馬踐死一犬、二人各記其事、以較工拙。穆修曰、馬逸、有黃犬遇蹄而斃。張景曰、有犬死奔馬之下。時文體新變、二人之語皆拙澁、當時已謂之工、傳之至今。」から見ても、穆修の文は冗長で、いまだ簡古な風格を追求したものとは言えないだろう。
- (22) 趙翼『廿二史劄記』卷一八「新書好用韓柳文」。

- (23) 祝穆『事文類聚』別集卷五「文不必換字」宋景文公修唐史、好以艱深之辭文淺易之說。歐公思有以諷之、一日大書其壁曰、宵寐匪貞、札闔洪休。宋見之曰、非夜夢不祥、書門大吉耶？何必求異如此！歐公曰、李靖傳云、震雷無暇掩聰、亦是類也。宋公慙而退。」
- (24) 蘇軾「司馬溫公行狀」司馬光の辭退の仕方はかなり強い調子のものであり、またその辭退の理由からみてもこれは單に禮法上からすることは思われない。
- (25) 『宋史研究論文集』所收。二二二頁。河南人民出版社一九八四年。
- (26) 歐陽修「薦布衣蘇洵狀」
- (27) 『文獻通考』卷三〇。馬端臨は次のように言う。『愚嘗讀此二篇（歐陽修「陳氏榮鄉亭記」、張穆之「觸鱗集」）而後知、五代之時、雖科舉未嘗廢、而士厄於離亂之際、不得卒業、或有所長而不能以自見、老死閭閻不爲少矣。』
- (28) 『宋史』卷一五七選舉志第三。
- (29) 『續資治通鑑長編』卷一八四仁宗嘉祐元年十二月乙卯條。
- (30) 葛曉音「北宋詩文革新的曲折歷程」（『中國社會科學』一九八九年第二期所收。一一五頁）
- (31) 同上 一一七頁。
- (32) 郭紹虞輯『宋詩話輯佚』に收める。
- (33) この間の狀況は中華書局『古典文學研究資料彙編 陶淵明卷』によって簡便に見ることができる。
- (34) 李塗『文章精義』その他、張耒「退之作詩、其精工乃不及柳子厚。」（『明道雜誌』）などがある。
- (35) 『增廣註釋音辯唐柳先生集』付録。
- (36) 柳宗元『河東先生集』付録卷上に薛昂「初封文惠侯告詞」を載せる。
- (37) 丘崇「重修羅池廟記」（柳宗元『河東先生集』付録卷下）。
- (38) 呂祖謙『古文關鍵』。この書の體例は「韓文、簡古」、「歐文、平淡」、「蘇文、波瀾」となっており、皆文風の形容である。また「看蘇文法」のところにも「亦得關鍵法」と述べており、これから見て、この「關鍵」という語は文風の形容である。「晉文公問守原議」の評語には「辭簡意多」、「送薛存義之任序」の評語には「雖句少、極有反覆。」とある。これらから考えて、「關鍵」の意味するところは「辭簡意多」であろう。
- (39) 柳宗元『河東先生集』付録卷上に王剛中「加封文惠昭靈侯告詞」を載せる。
- (40) 吳文治編『古典文學研究資料彙編 柳宗元卷』から抄録した。この書は完全なものではないがおおよその狀況は知ることができる。以下、抄録した姓氏を掲げておく。原文は同書を見られたい。
- 黃伯思、汪藻、呂本中、沈晦、王十朋、洪邁、朱熹、呂祖謙、張敦頤、高似孫、趙善憫、黃翰、羅大經、黃震、史繩祖、謝枋得

(41) 「與李宗諤書」。

(42) 「述夢詩序」。

(43) 諸橋轍次「儒學の目的と宋儒の活動」(大修館書店「諸橋轍次著作集」第一卷所收)、また又、蕭公權「中國政治思想史」(上海書店民衆叢書所收)を參考。

(44) 「周禮致太平論」の細目には「內治」、「國用」、「軍備」、「刑禁」、「官人」、「教道」などがあり、この他李觀には「富國策」、「強兵策」、「安民策」、「平土書」、「慶曆民言」などの文章がある。

(45) 『四庫提要』盱江集提要は「李觀不喜孟子」の問題について考證を行い、「特偶然偏見」と結論づけている。この結論は妥當なものと思われる。また「常語」佚文によって窺える。『直講李先生文集』には未收。宋 余允文『尊孟辨』に據って補う。また中華書局『李觀集』付録一に收める。

(46) 『柳文指要』下卷六「王介甫輕韓」。

(47) また同じ趣旨の議論は「王氏續經說」、「讀唐志」などにも見える。

(48) 蕭氏上掲書一六八頁。

(49) 陸游『老學庵筆記』卷一〇に「予曰、東坡公在嶺外、特喜子厚文、朝夕不去手、與陶淵明竝稱二友。及北歸、「與錢濟明書」乃痛詆子厚「時令」、「斷刑」、「四維」、「貞符」諸篇、至以爲小人無忌憚者。豈亦由朝夕袖繹耶?恐是『非國語』之報。」とあり、陸游は「與錢濟明書」と言っているが、これは

宋人の見た柳宗元(副島)

陸游の記憶違い。蘇軾と江淳禮とが相識したのは蘇軾の黃州謫居時代である。

(60) 柳宗元『河東先生集』付録卷上。

(61) 同上付録卷下。

(62) 蕭公權上掲書一四三頁。

本稿は中國留學中に草した研究報告の一部であり、その際、復旦大學の王運熙、王水照兩教授から懇切な指導を賜わった。兩先生に心から感謝したい。